

獣医師国家試験
出題基準
(平成26年改正)

平成26年9月4日

獣医事審議会

留 意 事 項

1. 本出題基準は、獣医師国家試験の出題に際して準拠する項目として整理したものである。
2. 本出題基準は、卒前教育の全てを網羅したものではなく、また、それを拘束するものでもない。
3. 本出題基準は、以下の4つのカテゴリに編成されている。
 - 獣医療の基本的事項
 - 獣医学の基本的事項
 - 衛生学に関する事項
 - 獣医学の臨床的事項
4. 大・中・小項目、備考については、おおむね次のような考え方で分類している。
 - 大項目…中項目を範ちゅう毎に総括する見出し的なものである。
 - 中項目…中心的な設問対象であり、標準的な教科書に記載されている程度の知識を要求する。
 - 小項目…より詳細な知識を要求する事項や重要な用語である。
 - 備考…参考となる事柄である。ただし、出題範囲を限定するものではない。
5. 本出題基準は、平成27年度に実施する第67回獣医師国家試験から適用される。ただし、出題に当たっては、各獣医大学における「獣医学モデル・コア・カリキュラム」への対応状況を勘案する。
6. 第67回以降の獣医師国家試験の出題内容と出題数は、別表のとおりである。
7. 必須問題については、
 - 『獣医療の基本的事項』（おおむね3割）
 - 『獣医学の基本的事項』、『衛生学に関する事項』、『獣医学の臨床的事項』のうち、獣医師として必ず備わっていなければならない事項及び動物あるいは公衆衛生に対

して重大な影響を与える非常に重要な事項（おおむね7割）より出題するものとする。

8. その他の注意事項は、以下のとおりである。

(1) 各項目におけるカッコは、以下のルールにより使用している。

(): 省略しても意味又は分類の変わらない語句

< >: 直前の語句の言い換え又は説明

[]: < > の中に < > が存在する場合の大きな括り

《 》: 対象となる動物種

【 】: 補足説明

(2) 備考中に「法」又は「届」と記載された感染症は、それぞれ家畜伝染病予防法に規定する「家畜伝染病」又は「届出伝染病」であることを示しており、その定義は同法に従うものとする。

(3) 獣医学の臨床的事項においては、中項目又は小項目に掲げられた疾患・障害名に関する「病因、病原性、疫学、病理、病態生理、症状、検査、診断、治療、予防<防疫>、予後」について、標準的な学生用の教科書に記載されている程度の内容を出題範囲とする。

(4) 獣医学の臨床的事項においては、ミツバチ及び魚類を除く飼育動物（一般に人が飼育する動物をいう。以下同じ。）を出題の対象とする。

(別表) 獣医師国家試験の出題内容と出題数

	出題内容	出題数
必須問題	「獣医療の基本的事項」及び、「獣医学の基本的事項」、「衛生学に関する事項」、「獣医学の臨床的事項」のうち重要な事項	50問
学説A	「獣医療の基本的事項」及び「獣医学の基本的事項」	80問
学説B	「衛生学に関する事項」及び「獣医学の臨床的事項」	80問
実地C	原則として「衛生学に関する事項」、「獣医学の臨床的事項」について、獣医療現場で実際に起こり得る症例・事例に関する基本的かつ重要な事項	60問
実地D	原則として「衛生学に関する事項」、「獣医学の臨床的事項」について、獣医療現場で実際に起こり得る症例・事例に対する対処方法等の総合的な事項	60問

目 次

獣医療の基本的事項	1
I 獣医師の役割・倫理、動物福祉、法・制度	2
獣医学の基本的事項	4
I 構造と機能	5
II 生殖と行動	10
III 薬理作用と毒性、放射線作用	13
IV 病原体と寄生体	21
V 発症機序と病理・病態	25
VI 主要症候	29
VII 検査と診断	34
VIII 治療と処置	39
衛生学に関する事項	44
I 動物衛生と公衆衛生	45
II 動物の飼育・衛生管理	48
III 魚類の飼育・衛生管理	53
IV 食品衛生	56
V 人獣共通感染症	60
VI 環境衛生	63
獣医学の臨床的事項	67
I 栄養	68
II 感染症	69
III 中毒	77
IV 呼吸器系と胸腔・胸膜の疾患	78
V 循環器系の疾患	80
VI 消化器系と腹腔・腹膜の疾患	82
VII 泌尿器系の疾患	86
VIII 繁殖障害と生殖器系の疾患	87
IX 運動器系の疾患	90
X 神経系の疾患	92
X I 感覚器系の疾患	94
X II 血液・免疫系の疾患	95
X III 内分泌・代謝系の疾患	96
X IV 皮膚の疾患	98
X V 乳房・乳腺の疾患	99
X VI 新生子の疾患	100
X VII 行動の疾患	101

獣医療の基本的事項

獣医師の役割、獣医師としての業務を遂行するに際して必要な倫理・規範的知識、動物福祉並びに法的知識及びこれらに関連する行政の仕組みについて、獣医師を取り巻く社会情勢の変化、獣医療を取り巻く社会的問題にも配慮した上で体系的に網羅する。

区 分	主な関連科目
I 獣医師の役割・倫理、 動物福祉、法・制度	----- 獣医学概論、獣医倫理・動物福祉学、 獣医事法規

I 獣医師の役割・倫理、動物福祉、法・制度

大項目	中項目	小項目	備考	
1. 獣医師の役割	A 獣医倫理	a 獣医師としての責務 b 社会的責任 c 法の遵守		
	B 飼育動物の所有者との関係	a インフォームドコンセント b 情報開示 c 個人情報の保護 d 飼い主の意向の尊重 e 飼い主の心理		
	C 動物福祉	a 動物福祉〈アニマルウェルフェア〉 b 動物愛護と虐待の防止 c 動物の権利 d 5つの自由 e 安楽死		
2. 診療情報と諸証明	A 診療簿、検案簿、家畜人工授精簿	a 診療簿・検案簿・家畜人工授精簿の管理と保存 b 診療簿・検案簿・家畜人工授精簿の内容 c 診療情報の開示		
	B 診療に関する諸記録	a 処方箋、指示書 b 検査所見記録 c 手術記録 d 画像記録 e 診断書 f 出生証明書 g 死産証明書 h 検案書 i 人工授精証明書 j 受精卵〈胚〉移植証明書		
3. 獣医療の質と安全の確保	A 獣医療の質の確保	a 科学的根拠に基づく獣医療 b 獣医療提供体制		説明義務、注意義務、過失（予見性、回避義務）
	B 獣医療事故の防止	a 獣医療過誤と獣医療事故 b 医薬品管理 c 医療廃棄物処理		
4. 社会と獣医療	C 医薬品・医療機器の副作用と不具合	a 有害事象と副作用・不具合 b 副作用への対応		
	A 統計分析	a 家畜衛生関係統計 b 公衆衛生関係統計		
	B 獣医療と社会との調和	a 産業動物獣医療と家畜共済制度 b 遺伝子組換え技術 c 学校飼育動物 d 補助犬		

大項目	中項目	小項目	備考
5. 行政機関	C 獣医師の職域 A 家畜衛生組織 B 公衆衛生組織 C 環境関係 D 水産関係 E 国際機関	e 動物介在教育、動物介在療法、動物介在活動 f 野生動物の保全と管理 g 動物園水族館の役割 h 伴侶動物の飼育実態 i 獣医師が組織する団体 a 伴侶動物獣医師 b 産業動物獣医師 c 行政獣医師・公衆衛生獣医師 d 実験動物の獣医師 e 展示動物・野生動物に関する獣医師 f 教育・研究開発に関する獣医師 a 農林水産省【動物検疫所、動物医薬品検査所を含む。】 b 動物衛生研究所 c 地方自治体【家畜保健衛生所を含む。】 a 厚生労働省【検疫所、国立研究所を含む。】 b 内閣府【食品安全委員会】 c 地方自治体【保健所、動物愛護管理センター等を含む。】 a 環境省	
6. 獣医行政法規	A 獣医事・薬事関連法規 B 家畜衛生行政関連法規	a WHO b OIE c FAO a 獣医師法 b 獣医療法 c 医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律（薬事法） d 毒物及び劇物取締法 e 麻薬及び向精神薬取締法 f 覚せい剤取締法 a 家畜伝染病予防法 b 家畜保健衛生所法 c 飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律 d 牛の個体識別のための情報の管理及び伝達に関する特別措置法 e 家畜改良増殖法 f 牛海綿状脳症対策特別措置法	

大項目	中項目	小項目	備考
7. 獣医史	<p>C 公衆衛生行政関連法規</p> <p>D 環境行政関連法規</p> <p>E 水産関連法規</p> <p>A 動物の家畜化と獣医療の発祥</p> <p>B 近代獣医療の発達</p> <p>C 日本の獣医療の発達</p>	<p>g 家畜排せつ物の管理の適正化及び利用の促進に関する法律</p> <p>a 感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律</p> <p>b 狂犬病予防法</p> <p>c 検疫法</p> <p>d と畜場法</p> <p>e 化製場等に関する法律</p> <p>f 食品衛生法</p> <p>g 地域保健法</p> <p>h 食鳥処理の事業の規制及び食鳥検査に関する法律</p> <p>i 食品安全基本法</p> <p>a 動物の愛護及び管理に関する法律</p> <p>b 廃棄物の処理及び清掃に関する法律</p> <p>c 水道法</p> <p>d 下水道法</p> <p>e 水質汚濁防止法</p> <p>f 大気汚染防止法</p> <p>g 悪臭防止法</p> <p>h 愛がん動物用飼料の安全性の確保に関する法律</p> <p>i 環境基本法</p> <p>j 遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律</p> <p>k 特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律</p> <p>l 鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律</p> <p>m 絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律</p> <p>a 持続的養殖生産確保法</p> <p>b 水産資源保護法</p>	

獣医学の基本的事項

獣医師としての職能を身につける上で、必要不可欠な基礎となる獣医学の分野を体系的に網羅する。

区 分	主な関連科目
I 構造と機能 -----	解剖学、組織学、発生学、生理学、生化学、免疫学、臨床繁殖学
II 生殖と行動 -----	生理学、動物遺伝育種学、動物行動学、臨床繁殖学
III 薬理作用と毒性、放射線作用 --	薬理学、毒性学、実験動物学
IV 病原体と寄生体 -----	微生物学、家禽疾病学、寄生虫病学
V 発症機序と病理・病態 -----	病理学、微生物学、家禽疾病学、動物感染症学、寄生虫病学、内科学総論、外科学総論
VI 主要症候 -----	内科学総論、呼吸循環器病学、消化器病学、泌尿生殖器病学、内分泌代謝病学、神経病学、血液免疫病学、皮膚病学、臨床行動学、外科学総論、軟部組織外科学、運動器病学、臨床腫瘍学、眼科学、産業動物臨床学、馬臨床学、臨床繁殖学
VII 検査と診断 -----	放射線生物学、病理学、免疫学、微生物学、家禽疾病学、魚病学、動物感染症学、寄生虫病学、内科学総論、臨床病理学、呼吸循環器病学、消化器病学、泌尿生殖器病学、内分泌代謝病学、神経病学、血液免疫病学、皮膚病学、臨床行動学、外科学総論、軟部組織外科学、運動器病学、臨床腫瘍学、眼科学、画像診断学、産業動物臨床学、馬臨床学、臨床繁殖学
VIII 治療と処置 -----	内科学総論、臨床薬理学、呼吸循環器病学、消化器病学、泌尿生殖器病学、内分泌代謝病学、臨床栄養学、神経病学、血液免疫病学、皮膚病学、臨床行動学、外科学総論、手術学総論、麻酔学、軟部組織外科学、運動器病学、臨床腫瘍学、眼科学、産業動物臨床学、馬臨床学、臨床繁殖学

I 構造と機能

大項目	中項目	小項目	備考
1. 生体の基本構造と機能	A 細胞の構造と機能	a 核	
		b 細胞質	
		c 細胞小器官	
		d 細胞膜	
		e 細胞骨格	
		f 細胞周期	
		g 細胞死	
		h 細胞間結合と基底膜	
	B 組織の構造と機能	a 上皮組織	
		b 支持組織〈結合組織、軟骨組織、骨組織〉	
		c 筋組織	
		d 神経組織	
		e 着床と原腸胚形成	
		f 胚葉〈外胚葉、中胚葉、内胚葉〉	
		g 間葉組織	
	C 生体構成物質の構造と特性	a 糖質	
		b 脂質	
		c タンパク質、アミノ酸	
		d 核酸、ヌクレオチド	
		e 無機質、ビタミン	
	D 内部環境とホメオスタシス	a 体液の組成	
		b 体液とその区分	
		c 体液のpH〈酸塩基平衡〉と浸透圧	
		d 体液量の調節	
E 細胞膜を介する物質輸送	a 細胞膜の性質		
	b 担体輸送〔能動輸送、促通〈促進〉拡散〕		
	c イオンチャネル		
	d 膜動輸送〈サイトーシス〉		
F 細胞の興奮発生と興奮伝導	a 静止膜電位と $\text{Na}^+ - \text{K}^+$ ポンプ		
	b 活動電位と電位依存性イオンチャネル		
	c 跳躍伝導		
G 情報伝達	a 細胞間情報伝達〈ホルモン、神経伝達物質、細胞増殖因子、サイトカイン、オータコイド〉		
	b 受容体〈細胞膜受容体、細胞内受容体、核内受容体〉		
	c 細胞内情報伝達系〈セカンドメッセンジャー、リン酸化反応〉		
H 遺伝情報の発現とタンパク質合成	a 遺伝情報とその発現〔DNAの合成、遺伝子の発現〈転写〉、遺伝子とその異常〕		
	b タンパク質の合成〈翻訳、局在〉		

大項目	中項目	小項目	備考
2. 呼吸器系	I 物質代謝	a 糖質の代謝〔解糖とクエン酸サイクル〈回路〉、血糖調節、糖新生、グリコーゲン代謝、ペントースリン酸回路〕	
		b 脂質の代謝〈合成と分解、輸送と蓄積、ケトン体、コレステロール〉	
	J 生体エネルギーの産生	c アミノ酸の代謝〈分解と合成〉	
		d 核酸代謝〈合成と分解〉	
		e 酵素、補酵素、補欠分子族	
		f 臓器特異性	
		g 臓器相関	
		a エネルギー代謝〈自由エネルギー、ATP、生体酸化〉	
		b 呼吸鎖と酸化的リン酸化	
		c クエン酸サイクル〈回路〉	
K 体温調節	d エネルギー代謝の測定〈呼吸商、基礎代謝量〉		
	e 発酵		
	a 熱産生と熱放散		
3. 循環器系	A 呼吸器系の発生	b 体温〈内温動物、外温動物、核心温度、外殻温度〉	
		c 体温調節機構と異常体温	
	B 呼吸器系の構造と機能	a 気管・気管支・肺の発生	
		a 呼吸器〈外鼻、鼻腔、副鼻腔、咽頭、喉頭、気管、気管支、肺〉	
		b 鶏の呼吸器	
		c 肺におけるガス交換と肺循環	
		d 血液のガス運搬とpH調節作用	
		e 呼吸運動と呼吸調節	
		f 呼吸器系の防御機構	
		g 気道反射	
C 胸腔・胸膜の構造と機能	a 心膜		
	b 心膜腔		
	c 縦隔		
3. 循環器系	A 循環器系の発生	d 呼吸運動	
		e コンプライアンスと胸腔	
	B 血管系の構造と機能	a 心臓・動脈系・静脈系の発生	
		a 血管〈動脈系、静脈系、毛細血管、吻合〉	
		b 心臓	
		c 心臓の自動性〈刺激伝導系〉	
		d 心臓の電氣的活動	
		e 心臓の収縮と心周期	
		f 心臓の神経性・内分泌性調節	
		g 循環力学と血圧調節	

大項目	中項目	小項目	備考	
4. 消化器系	C リンパ系の構造と機能	h 特殊部位の循環		
		i 微小循環		
		a リンパ管〈乳び槽、胸管〉		
		b リンパ節		
		c 粘膜付属リンパ組織〈孤立リンパ小節、集合リンパ小節、扁桃〉		
		d リンパ中心		
		e 血リンパ節		
		f 脾臓		
		g 胸腺		
		h ファブリキウス嚢		
		A 消化器系の発生	a 口蓋・消化管・消化腺の発生	
		B 消化器系の構造と機能	a 口〈口腔、歯、舌、口唇、頬、口蓋〉	
b 消化管〈咽頭、食道、胃、小腸、大腸、肛門〉				
c 消化腺〈口腔腺、肝臓・胆嚢、膵臓〉				
d 反芻動物の胃				
e 鶏の消化器				
f 消化管機能の調節				
g 胃腸管の運動				
h 唾液・胃液・膵液・胆汁・腸液の分泌				
i 栄養物の消化と吸収				
j 反芻動物の消化と吸収				
k 栄養素の利用				
l 消化管ホルモン				
5. 泌尿器系	C 腹腔・腹膜の構造と機能	a 腸間膜		
		b 網膜		
		c 網嚢		
		d 間膜		
		A 泌尿器系の発生	a 腎臓・尿管・膀胱の発生	
		B 泌尿器系の構造と機能	a 腎臓、尿管、膀胱、尿道	
			b 鶏の泌尿器	
			c 糸球体濾過	
			d 尿細管の機能	
			e 尿の濃縮と希釈	
			f クリアランス	
			g 腎機能の調節	
h 酸塩基平衡				
i 腎臓のホルモン				
6. 生殖器系	A 生殖器系の発生		a 雄性生殖器・雌性生殖器の発生	
	B 雄性生殖器系の構造と機能		a 雄性生殖器〈精巣、精巣上体、精管、精索、副生殖腺、陰茎、陰嚢〉	

大項目	中項目	小項目	備考
7. 運動器系	C 雌性生殖器系の構造と機能	b 鶏の雄性生殖器	
		a 雌性生殖器〈卵巣、卵巣嚢、卵管、子宮、膣、外生殖器〉	
		b 胎盤	
	A 運動器系の発生	c 鶏の雌性生殖器	
		a 骨・軟骨・筋の発生	
	B 骨の構造と機能	a 緻密骨〈皮質骨〉、海綿骨、骨髄	
		b 骨格〈頭蓋、脊柱、胸郭、前・後肢骨、骨盤〉	
		c 鶏の骨格	
		d 骨代謝	
		C 筋の構造と機能	a 骨格筋〈頭頸部、背部、胸部、腹部、腰部、前・後肢〉
b 心筋			
c 平滑筋			
d 筋の収縮機構			
e 筋紡錘、腱受容器			
f 神経筋伝達			
g 筋の代謝と疲労			
D 関節の構造と機能	a 軟骨の構造と代謝		
	b 滑膜		
	c 関節		
E 腱、靭帯の構造と機能			
8. 神経系	A 神経系の発生	a 中枢神経系・末梢神経系の発生	
		b 神経堤細胞	
	B 中枢神経・末梢神経の構造と機能	a 脊髄と伝導路	
		b 脳〈大脳、間脳、中脳、小脳、橋、延髄〉	
		c 脳室、延髄中心管、脊髄中心管	
		d 体性神経系〈脳神経、脊髄神経〉	
		e 自律神経系〈交感神経、副交感神経〉	
		f ニューロン、グリア細胞	
		g シナプス、神経伝達物質	
		h 運動系伝導路と運動制御系	
i 感覚系伝導路			
j 反射弓			
9. 感覚器系	A 感覚器系の発生	k 血液-脳関門と脳脊髄液	
		l 情動と本能行動	
	B 感覚器系の構造と機能	a 視覚器・平衡聴覚器の発生	
		a 視覚器	
		b 平衡聴覚器	
		c 嗅覚器〈嗅粘膜〉	
		d 味覚器〈味蕾〉	

大項目	中項目	小項目	備考
10. 血液、造血器系	A 血液・造血器系の発生 B 血液・造血器の構造と機能	e 特殊感覚〈視覚、聴覚、平衡覚、嗅覚、味覚〉 f 体性感覚 a リンパ球の発生〈遺伝子再構成〉 a 骨髄、リンパ組織、脾臓 b 血液細胞〈赤血球、白血球、血小板〉 c 凝固・線溶系 d 血漿タンパク質	
11. 内分泌系	A 内分泌系の発生 B 内分泌系の構造と機能	a 下垂体・松果体・甲状腺・上皮小体・胸腺・副腎の発生 a 視床下部、下垂体、松果体 b 甲状腺、上皮小体 c 副腎 d 膵島 e 生殖腺〈精巣、卵巣〉 f 腎臓、肝臓、胸腺、心臓、消化管、胎盤 g ホルモンの種類 h ホルモンの合成・分泌とその調節 i ホルモンの作用機序 j 成長と代謝 k ストレス反応	
12. 外皮	A 外皮の発生 B 外皮の構造と機能	a 皮膚とその付属器の発生 a 皮膚 b 付属器〈角質器、皮膚腺、乳腺、変形腺〉	
13. 免疫	A 免疫系の構造と機能	a 免疫器官〈骨髄、胸腺、リンパ節、ファブリキウス嚢、脾臓、扁桃、パイエル板〉 b 免疫担当細胞〔リンパ球〈T細胞、B細胞、NK細胞〉、抗原提示細胞〈マクロファージ、樹状細胞、B細胞〉〕 c 免疫グロブリン d 補体 e サイトカイン f 自然免疫と獲得免疫 g 免疫応答とその調節 h 抗原の認識〈MHC拘束性〉 i 免疫寛容と自己免疫	

II 生殖と行動

大項目	中項目	小項目	備考	
1. 生殖子の形成と成熟	A 卵子の形成と卵胞の発育			
	B 卵子の成熟と排卵			
	C 精子の形成と成熟			
	D 精子の形態と機能			
	E 射精			
2. 性成熟と生殖周期	A 雄・雌の性成熟	a 生殖器の変化 b 春機発動、性成熟期 c 繁殖供用適齢期		
	B 生殖周期	a 完全生殖周期 b 不完全生殖周期 c 季節周期（周年繁殖、季節繁殖） d 日周期		
	C 発情周期（性周期）	a 発情周期、月経周期、卵巣周期 b 完全発情周期、不完全発情周期 c 単発情、多発情		
	D 発情周期中の生殖器の変化	a 卵巣の変化（卵胞発育・成熟、排卵、黄体発育・退行、卵胞ウエーブ） b 副生殖器の変化		
	E 発情周期中のホルモンの変化	a 黄体退行からLHサージまで b LHサージから黄体退行まで		
	F 発情期の性行動（雄）	a フレーメン b マウンティング		
	G 発情期の性行動（雌）	a マウンティング b スタンディング c 歩行数増加		
	H 排卵の機序	a 自然排卵 b 交尾排卵		
	I 交配適期			
	3. 受精と着床	A 受精の条件		
		B 受精の過程	a 精子の受精能獲得 b 先体反応 c 多精拒否	
C 胚の発生と発育				
D 着床		a 胚の子宮内分布 b 着床の形式 c 着床過程		
4. 妊娠と胎子発育	A 胎子			
	B 胎水、胎膜、胎子付属物			
	C 胎盤			
	D 妊娠期間			
	E 単胎動物における多胎妊娠			
	F 多胎動物の同期・異期複胎妊娠			

大項目	中項目	小項目	備考	
5. 分娩と新生子	G 妊娠とホルモン			
	H 母体の妊娠認識			
	I 妊娠時における母体の変化			
	A 分娩発来の機序			
	B 分娩前徴			
	C 産道	a 骨部産道 b 軟部産道		
	D 分娩の経過	a 開口期〈第一期〉 b 産出期〈第二期〉 c 後産期〈第三期〉		
	E 分娩後の生殖器の修復と発情回帰	a 子宮の修復 b 悪露 c 分娩後の発情回帰		
	F 泌乳			
	G 新生子の生理			
6. 遺伝学の基礎	A 遺伝子と表現型	a メンデル遺伝 b 優性、劣性、不完全優性 c 伴性遺伝、限性遺伝、母性遺伝 d エピジェネティクス		
	B 染色体とゲノム	a 減数分裂、配偶子形成 b 核型、半数体 c 倍数体と異数性、染色体異常 d 連鎖と組換え、交叉 e DNAの複製、遺伝子発現 f 突然変異		
	7. 遺伝学の応用	A 遺伝的改良	a 集団遺伝学 b 遺伝的パラメータ c 選抜 d 育種価 e 家畜の起源と品種 f 遺伝的多様性	
		B 形質の遺伝	a 生産形質の遺伝 b 多因子支配の形質 c 血液型の遺伝 d 毛色の遺伝 e 免疫遺伝学	
		C 遺伝学的解析	a 多型マーカー、個体識別 b 家系解析、連鎖解析 c QTL解析	
		D 動物の遺伝性疾患	a 臨床、病態、原因 b 遺伝様式 c 遺伝子頻度 d 遺伝子診断	

大項目	中項目	小項目	備考	
8. 行動学総論	A 行動学の基本概念	e 遺伝性疾患への対処		
		a 行動学研究の4分野〈究極要因、至近要因〉		
		b 行動生態学〈適応度、包括適応度、血縁淘汰〉		
		B 行動の進化	a 自然選択説、人為的選択	
		b 家畜化と行動変化		
		C 行動の発達	a 早成性動物と晩成性動物	
		b 発育ステージ〈新生子期、移行期、社会化期、若年期〉		
D 行動の周期性	a 日周リズム			
	b 年周リズム			
	c その他の周期性			
E 行動の動機づけと情動系	a 行動の動機づけ			
	b 大脳辺縁系と情動行動の発現			
	c 大脳新皮質による情動の制御			
F 行動に影響する生体物質	a 神経伝達物質・神経修飾物質と行動			
	b ホルモンと行動			
	c 行動に影響する主な化学物質			
G 行動変容と学習理論	a 刺激と反応の関係			
	b 古典的条件づけとオペラント条件づけ〈強化、消去〉			
	c 高度な学習行動			
9. 行動学各論	A コミュニケーション行動	a 信号の重複と儀式化		
		b 視覚・聴覚・嗅覚を用いたコミュニケーション行動		
	B 生殖行動	a 生殖戦略		
		b 性行動		
c 育子行動				
C 社会行動	a 群れの社会構造			
	b 敵対的行動			
	c 親和的行動			
D 維持行動	a 摂食行動			
	b 排泄行動			
	c 身づくろい行動			

Ⅲ 薬理作用と毒性、放射線作用

大項目	中項目	小項目	備考
1. 薬理学と毒性学	A 薬理学		
	B 毒性学		
2. 薬理作用と毒性の基本概念	A 薬理作用・毒性の種類		
	B 主作用と副作用		
3. 化学物質〈医薬品、毒性物質〉の体内動態	A 化学物質の生体内進入〈投与、暴露〉経路	a 投与 b 意図的暴露 c 職業的暴露 d 環境暴露	
	B 体内動態と環境中動態		
	C 薬力学		
	D 膜透過と吸収	a 生体膜通過〔単純〈受動〉拡散、濾過、担体輸送〔能動輸送、促進〈促進〉拡散〕、酸解離指数〈pKa〉、脂溶性〕	
	E 分布	a 血漿タンパク質結合率 b 組織移行 c 蓄積 d 再分布	
	F 代謝〈生体内変化〉	a 酸化 b 還元 c 加水分解 d 抱合 e ミクロソームと非ミクロソーム酵素系 f シトクロームP450 g 代謝酵素誘導と阻害 h 解毒と代謝的活性化	
	G 代謝と毒性発現に影響する因子	a 遺伝的要因 b 動物種差 c 生理的要因 d 環境要因 e 代謝酵素の誘導・阻害と薬物相互作用	
	H 排泄	a 尿細管での分泌と再吸収 b 腸肝循環 c 乳汁移行	
	I 薬物動態	a コンパートメントモデル b 半減期〈T _{1/2} 〉 c 分布容積〈V _d 〉 d クリアランス e 血中濃度－時間曲線下面積〈AUC〉 f バイオアベイラビリティ〈生物学的利用率〉 g 初回通過効果 h 治療的薬物モニタリング〈TDM〉	

大項目	中項目	小項目	備考
4. 化学物質の生体への影響	A 薬物・毒性物質の種類と薬効	a 作用機序、使用目的による分類 b 化学構造式による分類	
	B 化学物質に対する生体防御機構	a バリアシステム〈血液脳関門、血液胎盤関門、血液精巣関門〉 b 代謝酵素の誘導 c 抗酸化酵素の誘導 d くみ出し機構〈P-糖タンパク質〉 e メタロチオネイン	
5. 薬理作用・毒性とその評価	A 薬理作用・毒性の基本形式	a 興奮作用と抑制作用 b 直接作用と間接作用 c 局所作用と全身作用 d 選択毒性 e 遅発性毒性 f 蓄積作用 g 毒性の可逆性 h 耐性と依存性	
	B 薬理作用・毒性の発現機構	a 受容体 b 細胞内情報伝達系 c GTP結合タンパク質 d セカンドメッセンジャー e イオンチャンネル f 受容体理論〈親和性、内活性、pA ₂ 、pD ₂ 〉 g 遺伝子	
	C 薬理作用・毒性を規定する要因	a 用量〔対数用量反応曲線、50%有効用量〈ED ₅₀ 〉、最少肺胞内濃度〈MAC〉、最少発育阻止濃度〈MIC〉、最少殺菌濃度〈MBC〉、50%致死量〈LD ₅₀ 〉、50%致死濃度〈LC ₅₀ 〉、治療係数〈安全域〉〕 b 適用法〔経口投与、注射投与〈血管内・外〉〕 c 薬物に対する感受性〈種差、系統差、性差、年齢差、個体差〉 d 耐性 e 相互作用〈協力作用、拮抗作用、競合型拮抗、非競合型拮抗〉 f 無作用量〈NOEL〉と無量〈NOAEL〉 g ADI、TDI	
	D 薬効評価	a 前臨床試験 b 臨床試験〈1相～4相〉 c 生物学的検定法 d 二重盲検法	
	E 毒性評価	a GLP	

大項目	中項目	小項目	備考
6. 環境毒性と環境毒性評価法	A 化学物質の環境中動態 B バイオアッセイ	b 毒性評価試験系	
		c 対照	
		d 信頼性の保証	
		e 危険性の評価	
		f 一般毒性試験	
		g 安全性薬理試験	
		h 遺伝毒性試験	
		i 発癌性試験	
		j 生殖発生毒性試験	
		k 吸入毒性試験	
		l 経皮毒性試験	
		m その他の特殊毒性試験	
7. リスクアナリシス	A リスクアセスメント B リスクマネージメント C リスクコミュニケーション	a 大気相・水相・土壌相での動態	
		a 指標生物	
		b 生態毒性試験	
		c 生物濃縮試験	
		d 魚毒性試験	
		e TLm (Median tolerance limit)	
		f Pow (オクタノール/水分配係数)	
		C 環境汚染物質	
		D 紫外線、放射線	
		A リスクアセスメント	
		B リスクマネージメント	
		C リスクコミュニケーション	
8. 動物実験法	A 動物実験のデザイン B 動物実験技術 C 疾患モデル動物 D 動物実験の微生物コントロール	a 実験動物の選択	
		b 実験動物の福祉	
		c 動物実験計画	
		a 保定法	
		b 個体識別法	
		c 投与方法	
		d 試料採取法	
		e 麻酔法・安楽死法	
		a 疾患モデル動物の開発	
		b 主な疾患モデル動物	
		a 微生物コントロールの意義	
		b 微生物コントロールの原理と方法	
c 微生物コントロールからみた実験動物の区分			
9. 末梢神経系に対する作用	A 局所麻酔薬 B コリン作動薬及び抗コリン作動薬 C 神経筋接合部遮断薬 (筋弛緩薬)	a コリン誘導体	
		b アルカロイド類	
		c ムスカリン受容体遮断薬	
		a 競合型遮断薬	
		b 脱分極遮断薬	

大項目	中項目	小項目	備考
10. 中枢神経系に対する作用	D 自律神経節作用薬	a 神経節興奮薬 b 神経節遮断薬	
	E コリンエステラーゼ阻害薬	a カルバメート化合物 b 有機リン化合物 c 再賦活薬	
	F アドレナリン作動薬及び拮抗薬	a カテコールアミン b その他の作動薬 c α 受容体遮断薬 d β 受容体遮断薬 e アドレナリン作動性ニューロン遮断薬	
	G 末梢神経毒性物質	a キノホルム b 遅発性神経毒性	
	A 全身麻酔薬	a 吸入麻酔薬 b 注射用麻酔薬	
	B トランキライザー、鎮静薬	a フェノチアジン系 b ブチロフェノン系 c ベンゾジアゼピン系 d $\alpha 2$ アドレナリン受容体作動薬	
	C 鎮痛薬	a オピオイド b オピオイド拮抗薬 c 解熱性鎮痛薬〈非ステロイド系抗炎症薬〉	
	D 抗痙攣薬		
	E 向精神薬	a 問題行動治療薬	
	F 中枢神経興奮薬		
11. オータコイド	G 中枢神経毒性物質		
	A ヒスタミンとその拮抗薬	a H1受容体拮抗薬 b H2受容体拮抗薬	
	B 5-HT〈セロトニン〉とその拮抗薬	a 受容体拮抗薬 b 再取り込み阻害薬	
	C レニン-アンギオテンシン系とその阻害薬	a アンギオテンシン変換酵素阻害薬 b アンギオテンシン受容体拮抗薬	
	D ブラジキニン		
	E アラキドン酸代謝産物	a プロスタグランジン類 b ロイコトリエン類	
	F 一酸化窒素		
	G サイトカイン類		
	A 非ステロイド系抗炎症薬		
	B ステロイド系抗炎症薬		
12. 抗炎症薬			
13. 循環・呼吸系に対する作用	A 抗心不全薬	a 強心薬〈強心配糖体、カテコールアミン類、ホスホジエステラーゼ阻害薬〉 b 心臓負荷軽減薬	
	B 抗不整脈薬		

大項目	中項目	小項目	備考	
14. 血液に対する作用	C 血管拡張薬	a 抗高血圧薬 b 抗狭心症薬		
	D 呼吸作用薬	a 呼吸興奮薬 b 鎮咳薬 c 気管支拡張薬		
	E 循環器毒性物質	a アルコール b 重金属 c ドキソルビシン		
	F 呼吸器毒性物質	a パラコート b アスベスト		
	A 血液凝固促進薬			
	B 抗プラスミン薬			
	C 血液凝固抑制薬			
	D 試験管内凝固防止薬			
	E 血栓溶解薬			
	F 抗貧血薬			
15. 塩類代謝・腎機能に対する作用	G 血液毒性物質			
	A 塩類代謝作用薬	a 酸性化薬 b 塩基性化薬 c 輸液製剤	緑内障治療薬	
	B 利尿薬	a 浸透圧性利尿薬 b ループ利尿薬 c サイアザイド系利尿薬 d カリウム保持性利尿薬 e 炭酸脱水酵素阻害薬		
	C 尿崩症治療薬			
	D 腎毒性物質	a 非ステロイド系抗炎症薬 b アミノグリコシド系抗生物質 c 重金属		
	16. 消化器機能に対する作用	A 催吐薬		
		B 制吐薬		
		C 抗潰瘍薬		a 胃酸抑制薬 b 粘膜保護薬
		D 下剤〈瀉下薬〉		
		E 抗下痢薬〈止瀉薬〉		
F 鎮痙薬				
G 胃腸機能調整薬				
H 消化器毒性物質				
17. 内分泌機能に対する作用【臓器に作用する物質を含む。】		A 副腎皮質ホルモン		
		B 甲状腺機能障害治療薬		
	C 糖尿病治療薬			
	D 繁殖に関する治療薬	a 視床下部ホルモン剤 b 性腺刺激ホルモン剤〈下垂体性、胎盤性〉		

大項目	中項目	小項目	備考
18. その他の臓器に対する作用		c 性ステロイドホルモン剤 d オキシトシン剤 e プロスタグランジン剤	
	E ビタミン		
	F 性ホルモン		
	G 内分泌毒性物質	a 外因性内分泌攪乱物質	
	A 肝機能毒性物質	a 四塩化炭素 b アフラトキシン c アセトアミノフェン	
	B 骨・軟骨組織毒性物質		
	C 皮膚毒性物質	a 刺激性皮膚炎 b アレルギー性皮膚炎 c 光毒性・光アレルギー性皮膚炎 d 接触性蕁麻疹	
	D 遺伝毒性物質	a DNA損傷・修復 b 変異原性	
	E 生殖発生毒性物質	a 雄性生殖器毒性 b 雌性生殖器毒性 c 発生毒性	
	F 発癌性物質	a イニシエーター b プロモーター c 直接発癌性物質 d 発癌前駆物質	
	G 視覚毒性物質		
	H 聴覚毒性物質		
	19. 免疫機能に対する作用	A 免疫抑制薬	
B 免疫毒性物質		a PCB及びダイオキシン類 b 抗悪性腫瘍薬	
20. 消毒薬の作用	A 四級アンモニウム塩〈陽イオン界面活性剤〉		
	B アルコール類		
	C ハロゲン化合物		
	D フェノール類		
	E 酸化薬		
	F アルキル化薬		
	G その他		
21. 化学療法薬、抗真菌薬の作用	A 抗菌薬	a サルファ薬とその協力物質 b キノロン系 c ニトロフラン誘導体 d βラクタム系 e アミノグリコシド系 f クロラムフェニコール系 g マクロライド系 h テトラサイクリン系 i ペプチド類	

大項目	中項目	小項目	備考
22. 駆虫薬の作用	B 抗ウイルス薬	j 抗真菌薬	
	C 抗悪性腫瘍薬	a アルキル化薬 b 代謝拮抗薬 c 抗腫瘍抗生物質 d 植物アルカロイド薬 e ホルモン関連薬 f 白金錯体 g 分子標的薬	
23. 殺虫薬・農薬の作用	A 線虫駆虫薬		
	B 条虫駆虫薬		
24. その他の薬理作用と毒性	C 吸虫駆虫薬		
	D 抗原虫薬		
25. 放射線	A 殺虫薬	a 有機塩素系 b 有機リン系 c カルバメート系 d ピレスロイド系 e フェニルピラゾール系 f ネオニコチノイド系 g アベルメクチン系 h 幼虫発育阻害薬	
	B 殺鼠薬		
25. 放射線	C 除草薬		
	A 重金属拮抗薬		
25. 放射線	B 中毒治療薬		
	C 天然毒性物質		
25. 放射線	A 放射線の種類と発生		
	B 放射性同位元素		
25. 放射線	C 放射線と物質の相互作用		
	D 放射線と放射能の単位	a 照射線量 b 吸収線量 c 線量当量 d 線エネルギー付与 e グレイ f シーベルト g ベクレル	
25. 放射線	E 放射線の線質と測定方法	a 半価層 b 蛍光ガラス線量計 c 光刺激ルミネッセンス線量計〈OSL線量計〉 d 電子式線量計 e 熱蛍光線量計〈TLD〉 f フィルムバッジ g ポケット線量計 h 電離箱	

大項目	中項目	小項目	備考
	F 放射線の生物作用 G 放射線の人体への影響 H 放射性防護の基本的考え方 I 放射線防護の手段 J 放射線発生装置	i シンチレーションカウンター j サーベイメーター(GMカウンター) a 放射線障害の基礎 b 放射線治療の基礎 a 急性障害 b 晩発性障害 c 確率的影響 d 確定的影響 e 体内被ばく f 外部被ばくと内部被ばく a 放射性防護体系 b 実効線量 c 当価線量 d 線量限度 a 管理区域 b 一次線と散乱線 c 防護具 d 被ばく管理 a 加速器	

IV 病原体と寄生体

大項目	中項目	小項目	備考
1. 細菌【リケッチア、クラミジア、マイコプラズマを含む。】	A 細菌の一般性状	a 形態〈球菌、桿菌、らせん菌〉	
		b 構造〈莢膜、べん毛、線毛、細胞壁、細胞質膜、細胞質、核、核様体、細胞質内顆粒、芽胞〉	
	B 細菌の発育と増殖	a 分裂	
		b 増殖と増殖曲線〈誘導期、対数期、静止期、死滅期〉	
		c 二種類以上の菌の混在状態における増殖〈共生、拮抗、衛星現象〉	
		d 培地の組成	
		e 培地における発育の特徴	
		f 増殖に必要な物理的条件〈酸素・二酸化炭素の要求性、温度、浸透圧、発育至適pH〉	
		g バクテリオシン	
		h バイオフィーム	
		i 生きているが培養できない菌〈VN C〉	
		C 細菌の栄養	
	b エネルギー源		
	c 栄養素		
D 細菌の代謝	a 解糖と発酵		
	b 合成		
	c 代謝の調節		
E 細菌の遺伝と変異	a ゲノムの構成と機能		
	b プラスミド		
	c バクテリオファージ		
	d 制限と修飾		
	e 突然変異		
	f トランスポゾン		
	g その他の変異		
	h 遺伝子の発現と調節		
F 遺伝物質の伝達	a 形質転換		
	b 接合		
	c 形質導入		
	d 遺伝子操作		
G 細菌の抵抗性	a 物理化学的環境因子〈温度、水分、表面張力、浸透圧、pH、放射線、音波、界面活性剤、殺菌性ガス〉		
	b 滅菌と消毒		
H 細菌の分類・同定・性状			
2. ウイルス	A ウイルスの一般性状	a 定義	
		b 測定法	

大項目	中項目	小項目	備考
	B ウイルスの増殖過程	<ul style="list-style-type: none"> c 構造〈基本構造、核酸、カプシド、エンベロープ、ペプロマー〉 d 構成物質〈核酸、タンパク質、脂質、炭水化物〉 a 一段増殖曲線 b 吸着 c 侵入 d 脱殻 e 転写と翻訳 f 核酸の複製 g 集合 h 放出 	
	C 感染に伴う細胞の変化	<ul style="list-style-type: none"> a 細胞変性効果〈CPE〉 b 細胞表面の変化 c 赤血球吸着現象 d 封入体形成 e 染色体異常 f トランスフォーメーション〈形質転換〉 	
	D 感染価の測定法	<ul style="list-style-type: none"> a 50%組織培養感染量〈TCID₅₀〉 b 50%発育鶏卵感染量〈EID₅₀〉 c 50%致死量〈LD₅₀〉 d プラック形成単位〈PFU〉 e ポック形成単位 f フォーカス形成単位〈FFU〉 	
	E ウイルスの培養	<ul style="list-style-type: none"> a 動物〈マウス、ウサギなどの実験動物〉 b 発育鶏卵〈至適卵齢、接種方法、ウイルス増殖の判定〉 c 培養細胞〈細胞の種類、細胞培養法、ウイルス増殖の判定〉 	
	F ウイルスの精製	<ul style="list-style-type: none"> a 濃縮と精製〈遠心分離法、限外濾過膜濃縮法〉 	
	G ウイルスの干渉現象とその応用	<ul style="list-style-type: none"> a 干渉現象 b インターフェロン c END法 	
	H ウイルスの変異	<ul style="list-style-type: none"> a 変異と変異体 b 誘発突然変異 c 遺伝的組換え d 病原性の変異 e 宿主域変異 f 抗原変異 g 遺伝子再活性化 h 遺伝子再集合 i 相補 	

大項目	中項目	小項目	備考	
3. 真菌	I 遺伝子操作	j 表現型混合とカプシド変換		
		k 欠損干渉		
	J ウイルスの不活化	a 遺伝子地図		
		b ベクター		
		c 組換えDNA		
	K ウイルスの分類・同定・性状	d 制限酵素		
		a 機序〈核酸の損傷、タンパク質の変性、エンベロープの破壊〉		
	4. 寄生虫	A 真菌の一般性状	b 作用要因〈物理的作用、化学的作用〉	
			a 真菌細胞の微細構造	
			b 真菌体の構成単位	
c 菌糸				
d 担孢子体				
B 真菌の培養		e 孢子		
C 真菌の遺伝と分類		a 遺伝学的事項〔世代交代、アナモルフ〈無性型〉、テレオモルフ〈有性型〉、性〈雌雄同株、雌雄異株〉〕		
		b 子嚢菌		
		c 担子菌		
		d 接合菌		
	e 有糸分裂〈無性〉孢子形成群〈不完全菌類〉			
4. 寄生虫	A 一般性状	f 鞭毛菌		
		a 分類〈原虫、蠕虫、節足動物〉		
	B 寄生現象	b 宿主〈終宿主、中間宿主、待機宿主、ベクター〉		
		a 宿主特異性、寄生部位特異性		
		b 形態変化		
	C 発育と増殖	a 変態		
		b 生殖〈有性・無性生殖、世代交代、単為生殖、幼生生殖〉		
		c 春季顕性化現象、自家治癒、発育停止		
		d 体内移行		
		e プレパテントピリオド		
D 寄生虫の分類と同定	f 定期出現性			
E 原虫類の形態と生活環	a 肉質鞭毛虫類			
	b アピコンプレックス類〈アピコンプレクサ類〉			
	c 繊毛虫類			

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
	F 蠕虫類の形態と生活環 G 節足動物の形態と生活環	d 微胞子虫類 a 吸虫類 b 鉤頭虫類 c 条虫類 d 線虫類 a ダニ類 b 昆虫類	

V 発症機序と病理・病態

大項目	中項目	小項目	備考
1. 病因論	A 内因	a 素因	
	B 外因	a 物理学的外因 b 化学的外因 c 生物学的外因 (ウイルス、細菌、真菌、寄生虫)	
2. 感染	C その他	a 医原病	
	A 宿主・寄生体関係	a 宿主-寄生体関係 b 病原性 c 非病原性 d 毒力 (ビルレンス、菌力)	
	B 感染と発症機序	a コッホ (Koch) の条件 b 顕性感染 c 不顕性感染 d 潜伏期 e 感染経路 f 病原体の体内伝播 g 宿主側の状態 [持続感染、保菌、菌血症、ウイルス血症、敗血症、日和見感染 (自発性感染)] h 二次感染 i 混合感染 j 遅発性感染 k 病原体の排出	
	C 感染・伝播の経路と感染源	a 水平伝播 b 垂直伝播 c 経口感染 d 経気道感染 e 接触感染 f 経皮 (皮膚) 感染 g 経胎盤感染 h 経卵感染 i 経乳感染 j 自家感染 k ベクター l キャリアー m 病原巣 (保有体、レゼルボア)	
	D 寄生体の病原性	a 細菌の病原性 b ウイルスの病原性 c 寄生虫の病原性	
	E 宿主の防御機構	a 非特異的機構 b 特異的機構	
3. 細胞の傷害と死 (退行性病変)	A 細胞傷害の形態変化とタンパク質代謝異常	a 混濁腫脹 b 水腫変性 c 空胞変性 d 硝子滴変性	

大項目	中項目	小項目	備考
4. 適応と修復	B 糖質代謝異常	e 硝子変性	
		f 粘液変性	
		g アミロイド変性	
		h フィブリノイド〈類線維素〉変性	
		i 角質変性	
		a 糖原〈グリコーゲン〉変性	
		b 糖尿病	
		c 糖原蓄積症〈糖原病〉	
		d 遺伝性ムコ多糖症	
		C 脂質代謝異常	a 脂肪変性
	b 間質の脂肪症		
	c 脂質蓄積症		
	D 尿酸代謝異常	a 尿酸塩沈着〈痛風〉	
	E 色素沈着異常	a ヘモグロビン	
		b ヘモジデリン	
		c ポルフィリン	
		d ヘマトイジン	
		e 胆色素〈黄疸〉	
		f リポフスチン	
		g セロイド	
		h メラニン	
		i 体外性色素	
		F 無機質代謝異常	a 石灰沈着
	b 銅		
	c 鉄		
	d 鉛		
	G 壊死	a 凝固壊死、乾酪壊死	
b 液化〈融解〉壊死			
c 壊疽			
d 脂肪壊死			
H アポトーシス			
I 老化			
J 封入体形成			
K 死後変化	a 自己融解		
	b 死後硬直		
A 萎縮	c 死斑、死冷、死後凝血		
	a 単純萎縮と数的萎縮		
	b 仮性肥大		
	c 生理的萎縮		
	d 栄養障害性萎縮		
	e 神経性萎縮		
	f 圧迫性萎縮		
	g 不使用性萎縮		
	h 内分泌性萎縮		
	i 貧血性萎縮		

大項目	中項目	小項目	備考	
5. 循環障害	B 細胞増殖のメカニズム	a 細胞周期		
	C 肥大と増生〈過形成〉	a 労働性肥大 b 代償性肥大		
	D 化生			
	E 再生			
	F 創傷治癒	a 創傷の種類 b 創傷の性状 c 創傷の治癒機転 d 創傷治癒に影響する因子 e 肉芽組織 f 骨折治癒 g 末梢神経の治癒		
	A 血液の循環障害	a 虚血〈乏血〉 b 充血 c うっ血 d 血行静止 e 副行循環〈側副循環〉 f 出血 g 止血 h 血栓症 i 塞栓症 j 梗塞		
	B リンパ液の循環障害	a 水腫 b リンパ流出〈リンパ漏〉		
	C ショック	a 原因と分類 b 成立機序 c 病態		
	6. 炎症	A 定義と原因		
		B 炎症のメディエーター		
C 炎症の組織反応		a 細胞傷害 b 血管反応 c 細胞反応 d 修復 e 急性炎症と慢性炎症		
D 炎症の病態〈影響〉		a 局所 b 全身		
E 炎症の種類		a 漿液性炎 b 線維索性炎 c 出血性炎 d 化膿性炎 e 壊疽性炎 f 増殖性炎 g 肉芽腫性炎		
7. 損傷	A 機械的損傷	a 挫傷		
	B 理学的損傷	a 熱傷		

大項目	中項目	小項目	備考
8. 免疫異常、アレルギー（過敏症）	C 化学的損傷	b 凍傷 c 電氣的損傷 d 放射線損傷	
	D 病的損傷	a 壊死 b 壊疽 c 潰瘍 d 瘻（管） e びらん f 穿孔	
9. 腫瘍	A 自己免疫病	a 先天性〈原発性〉	
	B 免疫不全症	b 後天性〈続発性、二次性〉	
	C アレルギー	a I～IV型アレルギー	
	A 定義と分類		
	B 腫瘍学で用いられる用語	a 実質、間質 b 異形成、異型性 c 過誤腫、分離腫 d 上皮内癌	
	C 腫瘍の形・性状と良性腫瘍・悪性腫瘍の鑑別	a 成長様式・速度 b 色調・質感 c 腫瘍細胞の特徴 d 腫瘍の浸潤・転移	
	D 生体に及ぼす影響	a 悪液質 b 腫瘍随伴症候群 c 機能性腫瘍	
	E 腫瘍免疫		
	F 腫瘍の原因	a 癌関連遺伝子 b 腫瘍発生の内因・外因 c 発癌機序	
	G 腫瘍の種類	a 上皮性腫瘍（良性・悪性） b 非上皮性腫瘍（良性・悪性） c 混合腫瘍 d ウイルス性腫瘍	
10. 奇形〈先天異常〉	A 原因	a 内因〈染色体異常、遺伝子の異常〉 b 外因〈感染性因子、化学的因子、物理的因子〉 c 臨界期	
	B 奇形の分類	a 重複奇形 b 単体奇形〈外表奇形、臓器奇形〉 c 組織奇形	
11. 環境性疾患〈毒性病理学の基礎〉	A 毒性病理学の概念と基礎病理学の基礎		

VI 主要症候

大項目	中項目	小項目	備考
1. 全身性の主要症候	A 意識障害		
	B ショック		
	C 起立不能〈困難〉		
	D 衰弱		
	E チアノーゼ		
	F 黄疸		
	G 体温の異常		
	H 悪液質		
	I 脱水		
	J 食欲の異常	a 減退 b 消失 c 異常亢進	
	K 飲水の異常		
	L 消瘦		
	M 肥満		
	N 胸水		
	O 腹水		
	P 浮腫		
	Q 気胸		
	R 気腫		
	S リンパ節腫脹		
	T 発育不良と虚弱		
2. 呼吸器症候	A くしゃみ		
	B 鼻漏		
	C 喘鳴		
	D 発咳		
	E 喀血		
	F 呼吸リズム・運動の異常		
	G 呼吸数の異常		
	H 呼吸音の異常		
3. 循環器症候	A 心雑音	a 収縮期 b 拡張期 c 連続性	
	B 心悸亢進		
	C 心拍、脈拍の異常	a 頸静脈の怒張 b 頸静脈拍動 c 脈拍数の異常 d 不整脈	
	D 血圧の異常	a 低血圧 b 高血圧	
	E 運動不耐性		
4. 消化器症候	A 口臭		
	B 異嗜		
	C 採食・咀嚼・嚥下障害	a 口腔内の異常 b 咽頭の異常	

大項目	中項目	小項目	備考
5. 泌尿器症候	D 反芻の障害 E 鼓脹〈噯気反射障害〉 F 流涎 G 嘔吐 H 吐出〈逆流〉 I 吐血 J 下血 K 便性状の異常	c 食道の異常	
		d 通過障害	
		e 誤嚥	
		a 噯気の過剰形成	
		b 噯気の排出障害	
		a 便秘	
		b 粘液便	
		c 脂肪便	
		d 白痢〈白色下痢〉	
		e 緑便	
		f 軟便	
		g 泥状便	
		h 水様下痢	
	i 鮮血便		
	j 粘血便		
	k メレナ		
	l 赤痢		
	L 排便障害〈困難〉		
	M 胃腸運動の異常		
	N 腹痛、疝痛		
	O 腹部膨満		
	A 乏尿、無尿		
	B 多尿		
	C 排尿動作の異常	a 頻尿	
		b 排尿困難	
		c 尿閉、無尿	
		d 排尿失禁	
	e 排尿痛		
	f 排尿姿勢の異常		
	g 尿淋瀝		
D 尿性状の異常	a タンパク尿		
	b 糖尿		
	c ビリルビン尿		
	d ケトン尿		
	e アセトン尿		
	f 血尿		
	g 血色素尿		
	h 筋色素尿		
	i 膿尿		

大項目	中項目	小項目	備考	
6. 繁殖障害と生殖器症候	A 発情の異常	j 細菌尿		
		k 尿沈渣		
		a 無発情		
		b 鈍性発情		
		c 持続性発情		
	B 不妊	d 短発情		
		e 無排卵性発情		
		C 低受胎〈リピートブリーディング〉		
7. 運動器症候	D 流産			
	E 難産〈異常分娩〉			
	F 悪露の異常			
	G 子宮修復の異常			
	H 交尾障害	a 交尾欲の異常		
		b 交尾不能		
	I 生殖不能症			
A 筋緊張				
B 筋萎縮				
C 筋硬直				
D 疼痛、腫脹				
E 姿勢の異常				
F 歩行の異常				
8. 神経系症候	A 不随意運動			
	B 痙攣			
	C 運動麻痺	a (完全) 麻痺と不全麻痺		
	D 運動失調			
	E 知覚障害			
	F 反射障害			
	G 自律神経障害	a ホルネル症候群		
	H 意識障害			
	I 異常運動			
	J 脱力			
	K 捻転斜頸			
	9. 感覚器症候	A 眼の異常	a 視覚障害	
b 眼の疼痛・腫脹				
c 眼の充血・出血				
d 流涙、眼脂				
e 眼球の突出と陥凹				
f 眼球の異常運動				
B 耳の異常		a 聴力障害		
		b 耳の痒覚		
		c 耳の疼痛		
		d 耳漏		
C 嗅覚障害				

大項目	中項目	小項目	備考
10. 血液・造血器症候	D 発声異常		
	A 貧血		
	B 溶血		
	C 出血傾向		
	D 血栓傾向		
	E 赤血球増加		
	F 白血球増加		
	G 白血球減少		
	H 血小板増加		
	I 血小板減少		
11. 内分泌・代謝・栄養症候	J 免疫異常、免疫不全		
	A 低タンパク血症		
	B 高タンパク血症		
	C 糖尿、血糖の異常		
	D 高脂血症		
	E 肥満症		
	F 水・電解質の代謝異常		
	G 酸塩基平衡の異常		
12. 皮膚・体表症候	H 肝性脳症		
	A 皮疹		
	B 被毛の異常		
	C 腫瘤		
	D 発汗		
	E 脂漏		
	F 掻痒		
	G 角化の異常	a 不全角化 b 錯角化 c 過角化 d 皮角	
	H 膿皮症		
	I 皮温不整		
	J 点状出血		
	K 粘膜充血		
	L 粘膜蒼白		
13. 乳房・乳腺症候	A 乳房腫脹		
	B 乳汁分泌異常		
	C 無乳汁		
	D 乳漏		
	E 血乳		
14. 行動症候	A 攻撃行動		
	B 恐怖・不安行動		
	C 沈うつ		
	D 興奮		
	E 過剰発声・咆哮		
	F 不適切な排泄		

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
	G 常同行動 H 自傷行動 I 多動 J 認知機能低下		

VII 検査と診断

大項目	中項目	小項目	備考
1. 問診	A 病歴の聴取	a 個体識別 b 環境 c 予防歴 d 家族歴 e 既往歴 f 現病歴	
	B 身体検査	a 検温 b 視診 c 触診【直腸検査を含む。】 d 聴診 e 打診 f 探診 g 嗅覚による検査 h 聴覚による検査 i 排せつ物の検査 j 姿勢・歩様検査	
	C 診療記録	a 保管期間 b 問題志向型診療記録〈POMR〉	
2. 動物の保定	A 牛・馬・豚の保定		
	B 小動物の保定		
3. 検査の基礎	A 意義と目標		
	B 種類と特性		
	C 結果の判定と解釈		
	D 機器・機材の安全な取扱い		
4. 臨床病理検査			
①検体検査	A 検体の採取と保存	a 採血〈種類、部位〉 b 採尿 c 第一胃内容液採取 d 生体穿刺 e 生検、細胞診 f 保存法と保存期間	
	B 一般臨床検査	a 乳汁検査 b 糞便検査 c 尿検査 d 髄液検査 e 穿刺液検査 f 精液検査 g 胃内容液検査 h 分泌液検査	
	C 血液検査	a 細胞学的検査 b 赤血球指数 c 超生体染色 d 血球像 e 血小板	

大項目	中項目	小項目	備考
	D 血液生化学検査	f 出血、凝固 g 赤血球抵抗 h 寄生体 a 血清タンパク質 b 酵素 c 糖質 d 低分子窒素化合物 e 有機酸 f 脂質 g ビタミン h 無機質 i 色素 j 微量元素 k 電解質 l 酸塩基平衡 m 血清総胆汁酸	
	E 免疫学的検査	a 皮内反応 b 免疫グロブリン c 自己抗体 d 補体 e 細胞性免疫 f 沈降反応 g 凝集反応 h 補体結合反応 i 中和反応 j 赤血球凝集抑制反応 k 溶血反応 l 免疫溶菌反応 m ELISA n 蛍光抗体法 o 標識試験法 p 色素試験 q ウェスタンブロット r 免疫クロマトグラフィー s フローサイトメトリー検査	
	F 微生物学的検査	a 染色法 b 培養法 c 分離・同定法 d 菌数測定法 e ウイルス感染価の測定法 f 薬剤感受性試験	
	G 寄生虫学的検査	a 虫卵・虫体検査法〈糞便、尿、喀痰、肛門周囲、生検材料〉 b 集卵法 c 虫卵培養法〈消化管内線虫類〉	

大項目	中項目	小項目	備考
②生体の機能検査	H 遺伝子検出による診断	d 子虫游出法〈牛肺虫〉	
		e 分離・同定法〈原虫類〉	
		f 標本作製法	
		g 皮膚搔爬検査法	
		h 圧平法	
		i 血液検査法	
		j 免疫学的検査法	
		k 寄生程度の判定法〈EPG、OPG、LP G〉	
		a ハイブリダイゼーション	
		b PCR	
		c 核酸の電気泳動	
		d ゲノム解析	
		I 病理（組織）学的検査、 生検、細胞診	a 病理解剖
	b 生検		
	c 標本作製		
	d 染色		
	e 組織化学		
	f 蛍光顕微鏡		
	g オートラジオグラフィー		
	h 電子顕微鏡		
	i 免疫組織化学		
	j 酵素抗体法		
	k <i>in situ</i> ハイブリダイゼーション		
	l 細胞診		
	A 内分泌検査		a 視床下部
		b 下垂体	
c 甲状腺			
d 上皮小体			
e 副腎皮質			
f 副腎髄質			
g 膵島、消化管			
h 性腺			
a 負荷試験			
B 肝・胆道機能検査		a 内分泌機能	
	b 外分泌機能		
C 膵・腸機能検査	a 血行動態		
	b 糸球体・尿細管機能		
D 腎機能検査	a 血圧		
	b 心電図		
E 心機能検査	c 心音図		
	d X線検査		
	e 超音波検査		
	a 脳波〈脳電図、EEG〉		
F 神経系・筋の検査	b 筋電図		

大項目	中項目	小項目	備考
5. 妊娠診断	G 眼科検査	c 神経学的検査	
		a 視覚試験	
		b 反射試験	
		c 流涙量検査	
		d 染色検査	
		e 鼻涙管疎通試験	
		f 眼圧検査	
		g スリットランプ検査	
		h 眼底検査	
		i 網膜電図検査	
6. 繁殖障害の診断	A ノンリターン法		
	B 直腸検査法	a 胎膜のスリップ	
		b 羊膜嚢の触知	
		c 妊角の膨大	
		d 子宮動脈の振動	
	C 膣検査法		
	D 子宮頸管粘液検査法	a 縮毛状検査	
		b スタンプスメア検査	
	E ホルモン検出診断法		
	F 超音波検査法		
G 腹部触診法			
H X線診断法			
7. 画像診断	A 乗駕試験		
	B 射精試験		
	C 精液・精子の検査		
	D 膣及び膣粘液検査		
	E 子宮頸管粘液の性状検査		
	F 直腸検査		
	G 超音波検査		
	H 子宮洗浄		
	I 子宮内膜バイオプシー		
	J 卵管疎通性検査		
K 性ホルモン検査			
L 染色体検査			
7. 画像診断	A X線検査	a X線像成立の基本	
		b 診療用X線発生装置	
		c X線撮影の基本的器材	
		d デジタルラジオグラフィ (DR)	
		e X線写真に影響する因子	
		f X線撮影法【保定法、保定具を含む。】	
		g X線解剖	
		h X線読影技術【所見記述法を含む。】	
		i 造影剤と造影検査	

大項目	中項目	小項目	備考
	B 超音波検査 C 内視鏡検査 D コンピューター断層撮影 〈CT〉検査 E 放射性同位元素を用いた 画像診断 F 磁気共鳴画像〈MRI〉検査	j X線透視法 k X線特殊診断法〈高圧撮影法〉 a 超音波検査の基本原理 b 超音波検査装置と周辺機器 c 超音波の音響特性 d 超音波の生体内特性 e ハーモニクイメーキング f 超音波ドプラ法 g 超音波検査技術 h 超音波読影法 i アーチファクト j 超音波生検法 a 内視鏡の基本原理 b 内視鏡の器材と構成 c 内視鏡による生検 d 消化管内視鏡検査 e 腹腔鏡 f 関節鏡 g 内視鏡下手術 a CT検査の基本原理 b CT読影 c アーチファクト a 基本原理 b シンチグラフィ c 単一光子放射断層読影法〈SPECT〉 d 陽電子断層読影法〈PET〉 a MRIの基本原理 b MRIの器材の構成と種類 c T1強調画像 d T2強調画像 e MRI読影 f アーチファクト	

VIII 治療と処置

大項目	中項目	小項目	備考
1. 治療の基礎	A 治療の意義と目的	a 疾病の治療と自然治癒	
	B 治療法の概念	a 原因的療法 b 対症的療法	
2. 治療の準備	A 保定		
	B 消毒		
3. 治療の基本手技	A 薬物の投与	a 簡易経口投与 b カテーテル投与 c 第一胃内直接投与 d 注腸 e 吸入 f 子宮内注入	
	B 注射法	a 皮下注射 b 筋肉内注射 c 静脈内注射 d 皮内注射 e 点滴	
	C 穿刺	a 胸腔穿刺 b 心膜穿刺 c 第一胃穿刺 d 腹腔穿刺 e 膀胱穿刺	
	D 瀉血		
	E 洗浄	a 体表洗浄 b 鼻腔洞腔洗浄 c 口腔洗浄 d 胃内洗浄 e 尿道・膀胱洗浄 f 洗眼、点眼 g 子宮洗浄	
	F 浣腸		
	G 塗擦、塗布		
	H 罨法		
4. 繁殖技術	A 発情の同期化	a 黄体退行法 b ジェスタージェン投与法	
	B 排卵の同期化と定時人工授精	a オブシンク法 b ジェスタージェンと多剤併用法	
	C 人工授精	a 人工授精の利害と損失 b 精液の採取 c 精液・精子の検査 d 精液の希釈と保存 e 精液の注入	
	D 胚（受精卵）の移植	a 胚移植の利害と損失 b 過剰排卵誘起 c 胚の採取・処理 d 胚の保存	

大項目	中項目	小項目	備考
5. 救急処置、集中治療	E 体外受精	e 胚の移植	
		a 卵子の採取と体外成熟	
	F 避妊	b 体外受精	
		c 受精卵〈胚〉の体外培養	
	G 分娩調整	a 雄性避妊	
		b 雌性避妊	
	H 人工流産	a 分娩誘起	
		b 分娩遅延処置	
	I その他の技術	a 性支配〈X精子とY精子の分離、胚の性別判別〉	
		b キメラ	
6. 損傷の治療と処置	A 心肺蘇生法	c 遺伝子組換え動物	
		d クローン動物	
	B 集中治療法	a 心肺停止の評価	
		b 気道確保	
		c 人工呼吸	
		d 心臓マッサージ	
		e 薬物療法	
		f 除細動	
		g 自己拍動再開後の処置	
	7. 炎症の治療と処置	A 創傷の治療と処置	a 創及び周囲の清浄化
b 止血			
c 辺縁切除			
d 縫合			
e 包帯			
f 排液			
g 移植			
B 挫傷の治療と処置			
C 理学的損傷の治療と処置			
D 化学的損傷の治療と処置			
E 病的損傷の治療と処置			
8. 腫瘍の治療	A 全身療法		
		B 局所療法	
9. 薬物療法の基本	A 手術療法		
		B 化学療法	
		C 放射線療法	
		D その他の療法	
		E 免疫療法	
		b 冷凍〈凍結〉外科療法	
9. 薬物療法の基本	A 投与量		
		B 特異体質	
		C 耐性	
		D 過敏性	
		E 蓄積作用	

大項目	中項目	小項目	備考
10. 抗菌薬治療の基本	F 協力作用		
	G 拮抗作用		
	H 配合禁忌		
	A 静菌作用と殺菌作用		
	B 抗菌スペクトル		
	C 薬剤感受性		
	D 多剤耐性と交差耐性		
11. 栄養管理	E 菌交代現象		
	F 副作用		
12. 輸液	A 栄養管理の基礎	a 基礎エネルギー要求量 b 維持エネルギー要求量 c タンパク要求量 d 水分要求量	
	B 栄養の補給法	a 経腸栄養 b 静脈栄養〈全静脈栄養、部分静脈栄養〉	
13. 輸血	A 輸液の目的		
	B 輸液の一般的注意		
	C 輸液の種類と投与方法		
	D 輸液の副作用		
14. 血液浄化	A 輸血の一般的注意	a 血液の適合性 b 交差〈交叉〉適合試験 c 血液型	
	B 血液の採取と保存	a 供血動物の選択 b 新鮮血と保存血 c 全血輸血と成分輸血	
	C 輸血の適応症と禁忌		
15. 放射線治療	D 輸血法		
	E 輸血の副作用		
16. 麻酔	A 血液透析		
	B 腹膜透析		
17. 放射線治療	A 放射線治療装置		
	B 放射線の治療効果に寄与する要因	a 線質と生物学的効果比〈LET、RBE〉 b 酸素効果 c 正常組織耐容線量と腫瘍致死線量 d 分割照射と回復、再酸素化 e 線量分布 f 他療法との併用効果	
18. 放射線治療	C 主要適応症	a 腫瘍の放射線感受性	
	D 放射線障害とその対策	a 全身的影響 b 局所的影響〈急性障害、晩発性障害〉	
19. 麻酔	A 術前管理	a 術前状態の評価 b 麻酔法の選択 c 血管確保	

大項目	中項目	小項目	備考
17. 外科手術の基本	B 局所麻酔	d 術前の絶食	
		e 麻酔前投薬	
	C 全身麻酔	f 鎮静薬・鎮痛薬の併用	
		a 局所麻酔薬の種類と特性	
	D 不動化、麻酔前投薬	b 局所麻酔法の種類と適用（脊椎麻酔、硬膜外麻酔、伝達麻酔、静脈内局所麻酔、浸潤麻酔、表面麻酔、周囲麻酔）	
		a 麻酔の作用機序	
	E 注射麻酔薬	b 麻酔の段階と徴候	
		a 麻酔前投薬の目的	
	F 筋弛緩薬	b 神経遮断薬（NLA）	
		a バルビツレイト	
	G 吸入麻酔薬	b ケタミン	
		c プロポホル	
	H 麻酔器具と用具	d アルファキサロン	
		a 麻酔薬の種類と特性	
	I 麻酔導入、術中モニタリングと管理	b 取り込みと排泄	
		a 医療ガスの供給と余剰ガスの排泄機構	
	J 術後管理と合併症	b 麻酔器と麻酔回路	
c 気管挿管に必要な器具			
K 疼痛管理	a 麻酔の維持法		
	b 麻酔深度のモニタリングと管理		
A 準備と消毒	c 呼吸器系のモニタリングと管理		
	d 循環器系のモニタリングと管理		
		e 体温のモニタリングと管理	
		f 人工呼吸器と人工呼吸法	
		g 麻酔係と麻酔記録	
		a 麻酔・手術からの回復	
		b 呼吸器系	
		c 循環器系	
		d 泌尿器系	
		e 代謝系	
		f 体温の異常	
		a 疼痛の機序と疼痛管理の理論	
		b 疼痛の評価	
		c 先取り鎮痛とマルチモーダル鎮痛	
		d 術後疼痛及び急性痛の管理	
		e 慢性痛の管理	
		f 癌性痛の管理	
		a 無菌手術の概念と重要性	
		b 手術施設の構造と管理	
		c 手術器材の準備と消毒	

大項目	中項目	小項目	備考
18. 産科処置の基本	B 手術器具・機材	d 手術者の準備と消毒 e 術野の準備と消毒 a 一般手術器具・機材 b 特殊手術器具・機材	
	C 基本的手術手技	a 分割法 b 止血法 c 結紮法 d 縫合法 e 排液法 f 包帯法	
	A 救助の準備 B 産科用器具・機材 C 産科処置の基本手技	a 胎子失位の整復 b 胎子の牽引摘出 c 帝王切開術 d 切胎術	
19. リハビリテーション	A 機能解剖学 B 運動生理学 C 運動療法	a ストレッチ b 筋力増強訓練 c 協調性訓練 d 歩行訓練	
	D 物理療法	a 水治療法 b 熱療法（温熱療法、低温療法） c 電気刺激療法 d マッサージ e レーザー光線療法 f 超音波療法 g 針灸療法	
20. 行動治療の基本	E リハビリテーションの評価		
	A コンサルテーション B 行動修正法	a 刺激制御（環境操作） b 順化 c 洪水法 d 系統的脱感作 e 拮抗条件づけ f 消去 g 罰	
21. 動物の安楽死法	C 薬物療法 D 外科的療法とその他の療法		
	A 安楽死の方法		

衛生学に関する事項

獣医師として身につけておくことが必要な公衆衛生及び飼育動物の保健衛生に関する知識・技能を体系的に網羅する。

区 分	主な関連科目
I 動物衛生と公衆衛生	微生物学、動物感染症学、寄生虫病学、動物衛生学、公衆衛生学総論、疫学、野生動物学
II 動物の飼育・衛生管理	実験動物学、動物感染症学、動物衛生学、家禽疾病学
III 魚類の飼育・衛生管理	魚病学
IV 食品衛生	食品衛生学、疫学
V 人獣共通感染症	動物感染症学、人獣共通感染症学、疫学、野生動物学、家禽疾病学
VI 環境衛生	環境衛生学、野生動物学

I 動物衛生と公衆衛生

大項目	中項目	小項目	備考	
1. 動物衛生の考え 方と概要	A 定義、目的、活動	a 動物衛生の目的 b 動物衛生活動の進め方		
	B 動物衛生の動行 ①畜産統計 ②疾病統計			
	C 家畜疾病の発生と予防活動	a 家畜の死産事故 b 衛生管理ガイドライン		
	D 公衆衛生分野との連携	a 公衆衛生に関連する動物衛生分野		
2. 公衆衛生の考え 方と概要	A 定義、目的、活動	a 公衆衛生の目的 b 公衆衛生活動の進め方		
	B 国民衛生の動向 ①人口統計	a 国民衛生の動向を示す指標とその求め方 b 人口静態 c 人口動態 d 生命表 e 国民生活基礎調査		
	②疾病統計	a 感染症発生動向調査 b 食中毒統計 c 患者調査		
	③生活環境衛生統計と環境保健統計	a 生活環境衛生の動向 b 環境保全の動向		
3. 疫学の方法論	C 疾病の発生と予防活動	a 疾病の発生要因 b 疾病の予防活動		
	D 動物衛生分野との連携	a 動物衛生に関連する公衆衛生分野		
	A 疫学の概念	a 疫学の定義と目的 b 獣医疫学の対象と範囲		
	B 標本の抽出法	a 母集団と標本 b 標本の抽出法 c 標本抽出デザイン d 標本サイズ		
	C 疫学指標	a 罹患率 b 累積罹患率 c 死亡率、累積死亡率 d 有病率 e 致命率〈致死率〉 f 発生率及び感染率 g 相対頻度 h 相対リスク i 寄与リスク j オッズ比		
	D 記述疫学			
	E 分析疫学	a 症例対照研究 b 生態学的研究 c 横断研究		

大項目	中項目	小項目	備考
4. 疾病の予防と防疫	F その他の疫学 G 因果関係 H 誤差とその抑制 I サーベイランス J スクリーニングとその評価法 K 疫学に必要な統計手法 L リスクアナリシス M 疾病の経済的評価 N 疫学資料	d コホート研究	
		a 介入研究〈実験疫学〉	
		b 理論疫学	
		c 血清疫学	
		d 分子疫学	
		a 偶然誤差とバイアス	
		b バイアスの抑制	
		a 敏感度、特異度、陽性反応的中度、陰性反応的中度	
		a データの種類、分布、信頼区間、統計量	
		b 推定	
		c 仮説検定	
		d 関連性の分析	
		a 目的と意義	
		b リスクアセスメント、リスクコミュニケーション、リスクマネジメント	
c 解析手法			
a 目的と意義			
b 手法の種類と原理			
a 疫学解析に利用可能な既存資料の収集・利用法			
5. 感染症とその対策	A 人と家畜の疾病制御 B 野生動物の疾病制御 A 感染症の疫学 B 感染症の予防、制御	a スクリーニングテスト	
		b 予防接種	
		c サーベイランス	
		d モニタリング	
		e 撲滅計画	
		a 保全生物学的リスク	
		a 発生要因〈宿主要因、病因要因、環境要因〉	
		b 流行の様相〈生物学的現象、時間的現象、地理的現象、社会的現象〉	
		c 流行の機序〈定義、種類、要因〉	
		a 動物用抗菌薬の正しい使い方	
		b 薬剤耐性菌の出現とその抑制法	
		c ワクチン〈特性、投与方法、副作用、プログラム〉	
		d 感染源・感染経路対策〈消毒、検疫、隔離、殺処分、焼却、埋却、摘発淘汰、移動禁止、衛生動物駆除〉	

大項目	中項目	小項目	備考
6. 非感染症とその対策 7. 疾病対策の経済的評価 8. 動物衛生行政 9. 公衆衛生行政 10. 人と動物の共生	C 家畜の悪性伝染病に対する国家防疫	a 越境性家畜伝染病とその国家防疫 b 家畜の新興・再興感染症の出現メカニズムとその防疫 c OIEのリスト疾病	
	D バイオハザードと病原体の危険度分類	a 病原体の危険度分類 b バイオハザード対策	
	E 法規	a 家畜伝染病予防法〈家畜伝染病、届出伝染病〉 b 海外悪性伝染病 c 特定家畜伝染病防疫指針 d 感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律〈動物由来感染症〉 e 検疫法 f 狂犬病予防法	
	A 非感染症の発生要因		
	B 非感染症の予防		
	C 主要な非感染症の疫学		
	A 部分査定法		
	B コストベネフィット分析		
	C 決定分析		
	A 組織		
B 法規			
A 獣医師の役割			
B 組織			
C 法規			
A 人と動物の共生の歴史			
B 動物の飼育に伴って問題となる事項と行政対応	a 動物管理 b 苦情処理 c 問題行動		
C 人と動物の共生を目指した公衆衛生行政の取り組み			

II 動物の飼育・衛生管理

大項目	中項目	小項目	備考
1. 家畜の管理衛生	A 家畜の管理形態	a 家畜飼養形態の変遷〔個体管理、群管理〈ハードヘルス〉〕	
	B 一般環境要因	b 畜舎管理と放牧管理 a 空気 b 気象要因 c 家畜の体温と環境への適応 d 気候 e 水 f 土壌 g 光	
	C 生産衛生	a 畜舎環境と衛生対策 b 乳牛の管理衛生〈新生子牛の管理衛生、育成牛の管理衛生、泌乳牛の管理衛生、乳生産管理衛生、搾乳衛生、疾病制御〉 c 肉牛の管理衛生〈肉牛の繁殖、子牛の衛生管理、疾病制御〉 d 豚の管理衛生〈一般衛生管理、疾病制御、SPF豚の管理衛生〉 e 鶏の管理衛生〈孵化場の管理衛生、初生雛・幼雛の管理衛生、ブロイラーの管理衛生、採卵鶏の管理衛生、疾病制御〉 f 特用家畜 g 農場HACCP h 飼養衛生管理基準 i 飼育施設の消毒 j 動物福祉・管理	
	D 放牧衛生	a 日本における放牧の現状と特質 b 放牧環境要因〈気象的要因、地勢的要因、生物的要因〉 c 放牧地の管理〈草地の管理、衛生動物と有毒植物対策、放牧施設の管理〉 d 放牧家畜の管理〈放牧形態の種類、放牧家畜の衛生管理〉 e 放牧病	
	E 輸送衛生	a 牛・馬・豚の輸送〔輸送ストレス、輸送衛生管理、輸送熱、PSE肉〈むれ肉〉〕 b 輸送性疾患の病原体と免疫機能要因	
	F 遺伝性疾患への対応 ①牛	a 牛白血球粘着不全症 b 牛複合脊椎形成不全症	

大項目	中項目	小項目	備考
2. 家畜の衛生的生産	②豚 G 人への影響 A 安全な畜産物	c クローディン16欠損症 d バンド3欠損症 e 第XIII因子欠乏症 f チェディアック・東症候群 g モリブデン補酵素欠損症	
		a 人獣共通感染症の予防 a 人獣共通感染症の予防 b 食中毒菌の保菌防止 c HACCP方式 d ポジティブリスト制度	
3. 家畜の飼養衛生	B 畜産廃棄物 A 飼養 B 栄養単位	a 家畜ふん尿の処理 b 畜産廃棄物の処理と資源化	
		a 飼養標準 a 可消化養分総量 (TDN) b 可消化エネルギー (DE) c 代謝エネルギー (ME) d 正味エネルギー (NE) e アイディアルプロテイン	
4. 生産獣医療システム	C 飼料の分類 D 飼料の給与法 E 飼料の鑑定 F 飼料の変質 G 飼料の安全性の確保	a 粗飼料 b 濃厚飼料 c 混合飼料 (TMR) d サイレージ e 動物質飼料	
		a 飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律 b 残留農薬 c 動物用医薬品 d 飼料添加物	
5. 小動物(伴侶動物)の飼養衛生管理	A 生産獣医療の概念 B 栄養管理 C 繁殖管理 D 搾乳管理 E 護蹄管理 F 育成管理 G 予防衛生管理	a 代謝プロファイルテスト (MPT) b 代謝異常	
		a 飼養管理 b 疾病管理	
5. 小動物(伴侶動物)の飼養衛生管理	A 健康管理 B 栄養管理 C 人への影響	a 人獣共通感染症の予防	

大項目	中項目	小項目	備考
6. 実験動物の飼育と衛生管理	<p>A 主な実験動物とその特性 【分類学上の位置、主な品種・系統、形態的特性、機能的特性、実験動物としての特徴を網羅する。】</p> <p>B 実験動物の生産供給</p> <p>C 実験動物の飼育管理</p> <p>D 人の安全確保</p> <p>E 実験動物の感染症</p>	<p>a マウス</p> <p>b ラット</p> <p>c シリアンハムスター</p> <p>d チャイニーズハムスター</p> <p>e スナネズミ</p> <p>f モルモット</p> <p>g ウサギ</p> <p>h スンクス</p> <p>i イヌ</p> <p>j ネコ</p> <p>k フェレット</p> <p>l ブタ</p> <p>m ヒツジ</p> <p>n ヤギ</p> <p>o アカゲザル</p> <p>p カニクイザル</p> <p>q コモンマーモセット</p> <p>r コモンリスザル</p> <p>s ニワトリ</p> <p>t ウズラ</p> <p>u アフリカツメガエル</p> <p>v メダカ</p> <p>w ゼブラフィッシュ</p> <p>a 育種の基礎</p> <p>b 各種系統の定義、遺伝的統御（交配）の様式、維持・生産</p> <p>c 遺伝的モニタリング</p> <p>d 微生物モニタリング</p> <p>e 発生工学的手法による開発〔キメラ動物、トランスジェニック動物、ノックアウト動物、クローン動物、胚性幹細胞（ES細胞）〕</p> <p>f 繁殖生理</p> <p>g 繁殖技術</p> <p>h 輸送</p> <p>a 気候・物理・化学的因子の影響</p> <p>b 栄養・生物学的・居住的因子の影響</p> <p>c 実験動物施設</p> <p>a 人獣共通感染症の予防</p> <p>b バイオハザードとケミカルハザード</p> <p>c 動物実験と環境保全</p> <p>a ティザー病</p> <p>b ネズミコリネ菌病</p>	

大項目	中項目	小項目	備考
		c 溶血レンサ球菌病 d 肺炎球菌病 e ブドウ球菌病 f 緑膿菌感染症 g マウス腸粘膜肥厚症 h ウサギ大腸菌病 i サルモネラ症 j カーバチルス感染症 k 気管支敗血症菌感染症 l パスツレラ病 m ヘリコバクター感染症 n 細菌性赤痢 o 結核 p 赤肢病 q センダイウイルス感染症 r マウス肝炎ウイルス感染症 s マウス肺炎ウイルス感染症 t マウス脳脊髄炎 u 乳酸脱水素酵素上昇ウイルス感染症 v エクトロメリア w マウスロタウイルス腸炎 x ウサギロタウイルス感染症 y リンパ球性脈絡髄膜炎 z マウスノロウイルス感染症 aa パルボウイルス感染症《マウス、ラット》 ab マウス白血病 ac マウス乳癌 ad 唾液腺涙腺炎 ae Bウイルス病 af サイトメガロウイルス病 ag 兔粘液腫（症） ah ウサギウイルス性出血病 ai ショーブ乳頭腫 aj エボラ出血熱 ak マールブルグ病 al ハンタウイルス感染症 am サル痘（モンキーポックス） an マイコプラズマ症 ao 皮膚糸状菌症 ap ウサギコクシジウム症 aq エンセファリトゾーン症 ar 腸トリコモナス症 as ジアルジア症	届届

大項目	中項目	小項目	備考
<p>7. ミツバチの衛生管理</p> <p>8. 展示動物の衛生管理</p>	<p>A ミツバチの感染症</p>	<p>at アメーバ赤痢</p> <p>au ニューモシスチス症（ニューモシスチス肺炎）</p> <p>av 小形条虫症</p> <p>aw 蟻虫症</p> <p>az サル腸結節虫症</p> <p>ay サル糞線虫症</p> <p>az ウサギの耳疥癬</p> <p>ba ケモチダニ症</p> <p>bb ズツキダニ症</p> <p>a 腐蛆病</p> <p>b チョーク病</p> <p>c ノゼマ病</p> <p>d バロア病</p> <p>e アカリンダニ症</p>	<p>法 届 届 届</p>

III 魚類の飼育・衛生管理

大項目	中項目	小項目	備考	
1. 魚類の飼育と衛生管理	A 魚類の分類	a 有用魚類		
		B 魚類の正常な構造と機能	a 皮膚 b 骨格 c 筋肉 d 呼吸 e 循環、造血 f 消化、吸収 g 神経、感覚 h 内分泌、生殖 i 浸透圧調節 j 浮力調節	
	C 魚類の飼育	a 種苗〈人工種苗、天然種苗〉		
		b 栄養と飼料・餌料		
		c 水質		
		d 飼育・養殖法		
	D 魚類の生体防御	a 非特異的生体防御		
		b 特異的生体防御		
	2. 魚病の診断・予防・治療	A 鎮静・麻酔法	a 鎮静・麻酔薬剤 b 鎮静・麻酔の段階と徴候	
		B 診断法		
		C 予防・治療法	a 水産用医薬品〈ワクチン、抗菌薬〉	
	3. 魚類の疾病	A ウイルス性感染症	①RNAウイルス	a ウイルス性出血性敗血症〈VHS〉
				b 伝染性造血器壊死症〈IHN〉
c 伝染性脾臓壊死症〈IPN〉				
d ウイルス性腹水症				
e ヒラメラブドウイルス病				
f ウイルス性神経壊死症〈VNN〉				
g コイ春ウイルス血症〈SVC〉				
h 赤血球封入体症候群〈EIBS〉				
i ウイルス性旋回病〈VWD〉				
②DNAウイルス				a ヘルペスウイルス病〈OMVD〉
				b コイヘルペスウイルス病〈KHVD〉
				c リンホシスチス症
				d コイの上皮腫
	e マダイイリドウイルス病			
	f クルマエビ急性ウイルス血症			
g バキュロウイルス性中腸腺壊死症				
B 細菌性感染症	①グラム陰性桿菌	a ビブリオ病		
		b 運動性エロモナス症		
		c せっそう病		
		d 穴あき病		
		e 赤点病		
		f エドワジエラ症		

大項目	中項目	小項目	備考
		g レッドマウス病 h 細菌性鰓病 (BGD) i カラムナリス病 j 海産魚の滑走細菌症 k 細菌性冷水病 l 類結節症 m アユのシュードモナス病 (細菌性出血性腹水症)	
	②グラム陽性桿菌	a 細菌性腎臓病 (BKD) b 非結核性抗酸菌症 c ノカルジア症	
	③グラム陽性球菌	a レンサ球菌症	
	C 真菌性感染症		
	①鞭毛菌類	a 水カビ病 b 真菌性肉芽腫症 c サケ科魚類稚魚の内臓真菌症	
	②接合菌類	a イクチオホヌス症	
	③不完全菌類	a オクロコニス症 b 胃鼓脹症	
	D 原虫病		
	①植物性鞭毛虫	a アミルウージニウム症	
	②動物性鞭毛虫	a イクチオボド症	
	③繊毛虫	a 白点病 (淡水魚、海水魚) b キロドネラ症 c トリコジナ症 d エピスチリス症	
	④微胞子虫	a ヘテロスポリス症 (ウナギのベコ病) b グルゲア症 c 微胞子虫症 (ブリのベコ病)	
	E 粘液胞子虫病	a 旋回病 b 筋肉クドア症 c 粘液胞子虫性側湾症 d コイ稚魚の鰓ミクソボルス症 e 粘液胞子虫性やせ病	
	F 大型寄生虫性感染症		
	①単生虫	a ギロダクチルス症 b ダクチロギルス症 c シュードダクチロギルス症 d ベネデニア症 e ヘテラキシネ症 f ビバギナ症 g ヘテロボツリウム症	
	②吸虫	a パラデオンタシリックス症 (血管内吸虫症)]	

大項目	中項目	小項目	備考
	③線虫 ④鉤頭虫 ⑤甲殻類 G 飼料性疾病 H 環境性疾病 I 腫瘍	a 筋肉線虫〈フィロメトロイデス〉症 b 生殖腺線虫〈フィロメトラ〉症 a 頸長鉤頭虫〈ロンギコラム〉症 a イカリムシ症 b カリグス症 c アルグルス〈チョウ・チョウモドキ〉症 a ビタミン欠乏 b 必須アミノ酸欠乏 c 必須脂肪酸欠乏 d 無機塩類欠乏 e 変敗飼料 f 飼料中の発癌性物質による腫瘍 a 温度 b 溶存ガス量 c 溶存窒素化合物 d 農薬中毒 a 自然発生性腫瘍 b 発癌性物質による腫瘍	

IV 食品衛生

大項目	中項目	小項目	備考
1. 食品衛生の概要	A 目的、対象、範囲	a 食の産業化 b 大規模事故 c 安全性 d 品質・安全性保障システム e 食糧不足 f 動物性食品 g 獣医療と自由貿易	
	B 健康障害	a 食品によって起こる危害 b 食品が媒体となって起こる危害 c 身体の反応によって起こる危害 d 食中毒	
2. 生体反応により生じる食品の有害性	A 食物アレルギー	a 定義と特徴 b 症状と病型 c 食物アレルゲン d アレルギー物質を含む食品の表示	
	B 腸内菌叢との相互作用による食品の有害性	a 腸内菌叢と健康	
3. 食品における微生物制御と腐敗	C 食品の機能	a 機能性食品と保健機能食品制度 b 組換えDNA技術を応用した食品	
	A 微生物汚染	a ミクロフローラ b 二次汚染	
4. 食品汚染が発生する背景とその影響	B 環境要因	a 温度 b 水素イオン濃度pH c 酸素濃度 d 水分〈水分活性〉	
	C 汚染指標微生物	a 一般指標細菌〈一般細菌〉 b 大腸菌群、糞便系大腸菌群、大腸菌 c 腸球菌 d 低温微生物	
	D 衛生管理		
	E 品質劣化	a 腐敗 b 化学的変化〈変質〉 c 食品の鮮度、腐敗の判定	
	F 腐敗防止	a 腐敗菌の発育抑制 b 腐敗菌の活性抑制 c 殺菌、滅菌、静菌、消毒	
	A 由来と汚染経路	a 生産過程における汚染 b 貯蔵課程における汚染 c 製造・加工・流通・販売課程での汚染 d 調理・消費過程での汚染	
5. 食中毒	A 細菌による食中毒	a 感染型食中毒 b 毒素型食中毒 c 赤痢菌	

大項目	中項目	小項目	備考
6. 食品・水媒介感染症		d チフス菌	
		e パラチフスA菌	
		f コレラ菌	
		g サルモネラ属菌	
		h 病原大腸菌〔腸管出血性大腸菌（V T産生）〕	
		i 腸炎ビブリオ	
		j カンピロバクター・ジェジュニ/コ リ	
		k エルシニア・エンテロコリチカ	
		l ウエルシュ菌	
		m NAGビブリオ	
		n セレウス菌	
		o ブドウ球菌	
		p ボツリヌス菌（乳児ボツリヌス症）	
		q エロモナス	
	r プレシオモナス		
	B ウイルスによる食中毒	a ノロウイルス	
		b A型肝炎ウイルス、E型肝炎ウイ ルス、アデノウイルス、ロタウイ ルス等	
	C 寄生虫及び原虫による食 中毒	a クドア・セプテンブクタータ	
		b サルコシスチス・フェイヤー	
	D 自然毒による食中毒	a 動物性食中毒（有毒魚、貝毒）	
		b 植物性食中毒（毒キノコ、有害植 物）	
		c 予防法	
	E 化学物質による食中毒	a 重金属及びヒ素	
		b 有機塩素系化合物（ダイオキシン 類）	
		c 農薬	
		d アレルギー様食中毒〔腐敗アミン （ヒスタミン等）〕	
	F その他の食中毒	a カビ毒（マイコトキシン）	
A 細菌	a リステリア		
	b エロモナス		
	c プレシオモナス		
	d 赤痢菌		
	e チフス菌		
	f パラチフスA菌		
	g コレラ菌		
B ウイルス	a ポリオ（急性灰白髄炎）		
C 寄生虫、原虫	a アニサキス		
	b 有棘顎口虫		

大項目	中項目	小項目	備考					
7. 食品添加物	A 使用目的と法的規制	c 横川吸虫						
		d ウェステルマン肺吸虫						
		e 肝蛭						
		f 日本海裂頭条虫						
		g 有鉤条虫						
		h 無鉤条虫						
		i 旋毛虫						
		j トキソプラズマ						
		k アメーバ赤痢						
		l クリプトスポリジウム						
		m ジアルジア						
		a 定義						
		b 使用目的						
c 分類								
d 指定基準								
e 食品添加物公定書								
f 規格基準								
g 表示基準								
8. 化学物質による食品汚染と食中毒以外の健康障害	B 安全性評価	a 毒性試験						
		b 最大無作用量						
		c 一日許容摂取量 (ADI)						
		d 使用基準の設定						
		C ポジティブリスト制度	A 有害物質に起因する健康障害	a 農薬、動物様医薬品等の残留				
				a 放射性物質				
				b 誘起性有害物質				
				c 偽造品 (偽和食品)、故意・過失による混入				
				d 過去に健康障害を誘発したメタノール、食品添加物等				
				9. 食品別衛生管理	A HACCP、GMP			
						B 乳及び乳製品の衛生	a 生乳の成分と性状	
							b 微生物汚染	
							c 化学物質による汚染	
d 殺菌								
e 衛生管理								
f 成分規格と検査法								
C 食肉の衛生	A HACCP、GMP						a 食肉とその加工品の衛生上の特徴	
		b 食肉生産における衛生管理						
		c と畜場の衛生						
		d と畜場外とさつ (切迫とさつ、自家用とさつ)						
		e 牛海綿状脳症 (BSE)						
		f 腸管出血性大腸菌、サルモネラ、カンピロバクター						

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
10. 食品衛生行政	D 食鳥肉の衛生	a 鳥及び食鳥肉による人の疾病 b 食鳥肉生産における衛生管理 c 食鳥処理工程と衛生管理 d 食鳥検査制度	
	E 卵の衛生	e 流通と消費における衛生管理 a 食品としての卵と人への健康危害 b 微生物汚染防止機構 c 品質と鮮度検査 d 生産における衛生管理 e 異常卵 f 卵のフードチェーンと各段階における衛生管理 g 卵とサルモネラ症	
	A 食品衛生行政	a 食品衛生行政の体制 b 食中毒発生事の行政対応 c 食品の監視体制【輸入食品を含む。】	
	B 食品衛生関係法律	a 食品安全基本法 b 食品衛生法 c 検疫法 d と畜場法 e 食鳥処理の事業の規制及び食鳥検査に関する法律 f 感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律	

V 人獣共通感染症

大項目	中項目	小項目	備考
1. 人獣共通感染症の定義と概要	A 定義、分類、防疫対策		
	B 新興・再興感染症		
	C 伝播様式		
	D 人獣共通感染症の法的基盤		
	E 我が国及び世界における人獣共通感染症の現状		
	F 人獣共通感染症の地理的分布		
2. 感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律に感染症として規定されている人獣共通感染症【各感染症の定義は同法に従う。】 ①ウイルス性感染症	A エボラ出血熱		
	B クリミア・コンゴ出血熱		
	C 南米出血熱		
	D マールブルグ病		
	E ラッサ熱		
	F 重症急性呼吸器症候群〈SARS〉		
	G 鳥インフルエンザ		
	H 新型インフルエンザ等感染症		
	I E型肝炎		
	J 黄熱		
	K 狂犬病		
	L ウエストナイル熱		
	M オムスク出血熱		
	N キャサヌル森林病		
	O サル痘		
	P 腎症候性出血熱		
	Q 西部ウマ脳炎		
	R ダニ媒介脳炎		
	S デング熱		
	T 東部ウマ脳炎		
	U ニパウイルス感染症		
	V 日本脳炎		
	W ハンタウイルス肺症候群		
	X Bウイルス病		
	Y ベネズエラウマ脳炎		
	Z ヘンドラウイルス感染症		

大項目	中項目	小項目	備考
②細菌性感染症	AA リッサウイルス感染症AB リフトバレー熱 A ペスト B 結核 C 細菌性赤痢 D 腸管出血性大腸菌感染症 E Q熱 F 炭疽 G ボツリヌス症 H 野兔病 I 回帰熱 J 鼻疽 K ブルセラ症 L ライム病 M 類鼻疽 N レプトスピラ症 O 破傷風 P オウム病 Q つつが虫病 R 日本紅斑熱 S 発しんチフス T ロッキー山紅斑熱		
③真菌性感染症	A コクシジオイデス症		
④寄生虫性感染症	A エキノコックス症		
	B クリプトスポリジウム症		
	C アメーバ赤痢		
	D ジアルジア症		
3. その他の人獣共通感染症			
①ウイルス性感染症	A ニューカッスル病		
	B リンパ球性脈絡髄膜炎		
	C 伝染性膿疱性皮膚炎		
	D 牛丘疹性口炎〈牛丘疹性口内炎〉		
	E 水胞性口炎〈水疱性口内炎〉		
②細菌性感染症	A 非結核性抗酸菌症		
	B パスツレラ症		
	C 豚丹毒		
	D リステリア症		
	E 非チフス性サルモネラ症		
	F エルシニア症		
	G カンピロバクター症		
	H 鼠咬症		
	I 仮性結核		

大項目	中項目	小項目	備考
③真菌性感染症	J 猫ひっかき病 K 悪性水腫 L 発疹熱 A クリプトコックス症 B 皮膚真菌症〈皮膚糸状菌症〉		
④原虫性感染症	C ヒストプラズマ症 A トリパノソーマ症 B トキソプラズマ症 C パベシア症 D サルマラリア E リーシュマニア症		
⑤蠕虫性感染症	A 肺吸虫症 B 肝吸虫症 C 横川吸虫症 D 住血吸虫症 E 肝蛭症 F 日本海裂頭条虫症 G マンソン裂頭条虫症 H 有鉤条虫症〈有鉤囊虫症〉 I 無鉤条虫症 J 回虫類の幼虫移行症 K アニサキス症 L 広東住血線虫症 M 糞線虫症 N 顎口虫症 O 犬糸状虫症 P 旋毛虫症〈トリヒナ症〉		

VI 環境衛生

大項目	中項目	小項目	備考
1. 自然環境及び環境衛生の概念	A 環境の概念と歴史	a 環境の概念 b 適応と順化（馴化） c 環境衛生の歴史（環境汚染と環境破壊）	
	B 環境衛生問題と獣医学	a 関連法規と獣医学	
	C 環境汚染のリスク対策	a 病原微生物と化学物質による環境汚染 b 化学物質対策 c リスク評価（リスクアセスメント） d 生物モニタリング	
	D 環境基本法と環境基準		
	E 環境影響評価		
2. 大気環境の衛生	A 大気環境	a 大気の組成 b 大気汚染の防止	
3. 水環境の衛生	A 水と人の健康	a 水を介した人の健康障害の特徴 b 水媒介感染症 c 有害化学物質による健康障害	
	B 上水と水道	a 水道の現状 b 原水の種類 c 水道法と水道施設 d 水道水質基準	
	C 浄水処理	a 浄水処理工程（急速ろ過法、緩速ろ過法、塩素処理） b 高度浄水処理	
	D 下水と下水道	a 下水（生活廃水と産業廃水） b 下水道と下水処理 c し尿浄化槽 d 排水基準（下水道法、水質汚濁防止法）	
	E 下水処理法	a 浮遊生物法（活性汚泥法、活性汚泥変法） b 酸化池法 c 生物膜法（散水ろ床法） d 嫌気性処理法 e 三次処理（高度処理法）	
	F 公共用水域（河川、湖沼、海域）の水質基準と水質検査	a 水質検査項目〔浮遊物質（SS）、溶存酸素（OD）、生物化学的酸素要求量（BOD）、化学的酸素要求量（COD）、n-ヘキサン抽出物、大腸菌群〕	
4. 土壌環境の衛生	A 土壌環境		
5. 室内環境の衛生	A 室内環境	a 光源と室内環境 b 室内環境と健康影響 c 室内環境と室外環境 d 室内環境と衛生管理	

大項目	中項目	小項目	備考
6. 廃棄物と環境	A 廃棄物	a 廃棄物の現状 b 廃棄物対策〈廃棄物処理法〉 c 廃棄物の分類〈一般廃棄物、産業廃棄物、特別管理廃棄物、感染性廃棄物〉 d 放射性廃棄物対策措置法	
	B 廃棄物処理	a 廃棄物の処理体制〈生活系ごみと事業系ごみ、産業廃棄物管理票制度、廃棄物最終処分場〉 b 廃棄物の輸出入 c 廃棄物のリサイクル	
7. 環境問題の概要	A 環境問題と国際対応	a アジェンダ21 b 気候変動枠組条約 c スtockホルム条約〈POPs条約〉 d カルタヘナ議定書	
8. 地球環境問題の概要	A 地球温暖化	a 気候変動枠組条約、温室効果ガス	
	B オゾン層	a ウィーン条約 b モントリオール議定書 c フロン	
	C 酸性雨		
	D 生物多様性	a 生物多様性条約 b ラムサール条約 c ワシントン条約 d カルタヘナ議定書 e レッドデータブック、レッドデータリスト	
	E 熱帯林の減少		
	F 海洋汚染	a マルポール条約 b ロンドン・ダンプング条約 c 国連海洋法条約	
	G 砂漠化		
	H 有害廃棄物越境問題	a セベソ事件 b バーゼル条約	
9. 地域の環境問題〈公害〉の概要	A 公害の歴史		
	B 大気汚染	a 大気汚染の定義 b 大気汚染の歴史〈健康障害の事例〉 c 産業型大気汚染 d 都市・生活型大気汚染 e 大気汚染物質〈ガス状物質、粒子状物質〉 f 大気に関わる環境基準と大気汚染防止法 g 気温の逆転層	
	C 水質汚濁	a 水質汚濁の外洋	

大項目	中項目	小項目	備考
10. 化学物質汚染対策	D 土壌汚染	b 水質汚濁の歴史〈健康障害の事例〉	
		c 水質汚濁の特徴	
		d 水質汚濁に関する環境基準と排水基準	
		e 水質汚濁の現状	
		a 土壌汚染の歴史と法律制定の経緯	
	E ダイオキシン類に関する環境基準	b 土壌汚染の特徴と健康リスク	
		c 土壌に関する環境基準と土壌汚染防止法	
		a TEF、TEQ	
		F 騒音、振動、地盤沈下、悪臭とそれらの法規制	
		G 都市環境	
A 化学物質による汚染	a ヒートアイランド		
	a 化学物質汚染の現状		
	b 化学物質による毒性の種類		
	c 毒性評価の指標		
	d 化学物質の規制〈化学物質の審査及び製造等の規制に関する法律、特定化学物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律、国際条約〉		
11. 放射性物質による汚染	A 放射線と放射性物質	a 放射線の種類	
		b 放射線に関する単位	
		c 自然放射線	
		d 放射線の利用〈人工放射線〉	
		a 放射性降下物	
12. 衛生動物	B 放射性物質による汚染事故	a 放射線の影響	
	C 人体に対する放射線の影響と被ばくの限度	b 被ばく線量評価	
	A 衛生動物の種類と危害	c 被ばく線量限度	
		a 病原体等を媒介する恐れのあるもの	
		b 公傷や吸血によって痛みやかゆみを引き起こすもの	
c 不快動物			
d 食料や衣服等を害するもの			
B 衛生動物の防除	a 環境整備		
	b 物理的・機械的防除		
	c 化学的防除		
	d 生物学的防除		
	e 遺伝的防除		
13. 野生動物	A 野生動物問題		

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
	B 野生動物の利用と国際的 課題 C 法制度	a 野生動物の利用と国際取引 b 生物多様性保全とその利益配分	

獣医学の臨床的事項

獣医師としての職能を獣医療現場で発揮する際に、求められる総合的かつ実践的な知識・技能を体系的に網羅する。

区 分	主な関連科目
I 栄養	薬理学、動物行動学、病理学、免疫学、微生物学、家禽疾病学、動物感染症学、寄生虫病学、動物衛生学、野生動物学、内科学総論、臨床病理学、臨床薬理学、呼吸循環器病学、消化器病学、泌尿生殖器病学、内分泌代謝病学、臨床栄養学、神経病学、血液免疫病学、皮膚病学、臨床行動学、外科学総論、軟部組織外科学、運動器病学、臨床腫瘍学、眼科学、画像診断学、産業動物臨床学、馬臨床学、臨床繁殖学、
II 感染症	
III 中毒	
IV 呼吸器系の疾患	
V 循環器系の疾患	
VI 消化器系の疾患	
VII 泌尿器系の疾患	
VIII 繁殖障害と生殖器系の疾患	
IX 運動器系の疾患	
X 神経系の疾患	
X I 感覚器系の疾患	
X II 血液・免疫系の疾患	
X III 内分泌・代謝系の疾患	
X IV 皮膚の疾患	
X V 乳房・乳腺の疾患	
X VI 新生子の疾患	
X VII 行動の疾患	

I 栄養

大項目	中項目	小項目	備考
1. 栄養素の利用と代謝	A 糖質 B 脂質 C アミノ酸 D ビタミン E ミネラル		
2. 栄養状態の評価	A BCS (ボディコンディションスコア)		
3. 疾患と栄養管理	A 消化器疾患 B 内分泌疾患 C 泌尿器疾患 D 循環器疾患 E アレルギー性疾患 F 運動器系疾患 G その他の疾患 H 術後、重症動物		

II 感染症

大項目	中項目	小項目	備考
1. ウイルス性感染症	A 口蹄疫		法
	B 牛疫		法
	C リフトバレー熱		法
	D 水胞性口炎〈水疱性口内炎〉		法
	E ブルータング		届
	F アカバネ病		届
	G 悪性カタル熱		届
	H チュウザン病		届
	I ランピースキン病		届
	J 牛ウイルス性下痢・粘膜病〈牛ウイルス性下痢ウイルス感染症〉		届
	K 牛伝染性鼻気管炎		届
	L (地方病性)牛白血病		届
	M アイノウイルス感染症		届
	N イバラキ病		届
	O 牛丘疹性口炎〈牛丘疹性口内炎〉		届
	P 牛流行熱		届
	Q アデノウイルス病		
	R 牛痘		
	S 偽牛痘		
	T 牛RSウイルス病		
	U 牛パラインフルエンザ		
	V 牛コロナウイルス病		
	W ロタウイルス病		
	X マエディ・ビスナ		届
	Y 山羊関節炎・脳脊髄炎		届
	Z 小反芻獣疫		届
	AA 伝染性膿疱性皮膚炎		届
	AB 羊痘		届
	AC 山羊痘		届
	AD 馬伝染性貧血		法
AE アフリカ馬疫		法	
AF 流行性脳炎〈日本脳炎、東部・西部馬脳炎、ベネズエラ馬脳炎、ウエストナイルウイルス感染症〉		法	
AG 馬インフルエンザ		届	
AH 馬ウイルス性動脈炎		届	
AI 馬鼻肺炎		届	
AJ 馬モルビリウイルス肺炎		届	
AK ボルナ病			
AL ゲタウイルス感染症			

大項目	中項目	小項目	備考
	AM 豚コレラ		法
	AN アフリカ豚コレラ		法
	AO 豚水泡病〈豚水泡病〉		法
	AP オーエスキー病		届
	AQ 伝染性胃腸炎		届
	AR 豚エンテロウイルス性脳脊髄炎		届
	AS 豚繁殖・呼吸障害症候群〈PRRS〉		届
	AT 豚水泡疹		届
	AU 豚流行性下痢		届
	AV ニパウイルス感染症		届
	AW サークウイルス関連疾病〈PCVAD〉〔豚の離乳後多臓器性発育不良症候群〈PMWS〉〕	a サークウイルス感染症	
	AX 豚インフルエンザ		
	AY 豚パルボウイルス感染症		
	AZ 高病原性鳥インフルエンザ		法
	BA 低病原性鳥インフルエンザ		法
	BB ニューカッスル病		法
	BC 鳥インフルエンザ		届
	BD 低病原性ニューカッスル病		届
	BE 鶏痘		届
	BF マレック病		届
	BG (鶏) 伝染性気管支炎		届
	BH 伝染性喉頭気管炎		届
	BI 伝染性ファブリキウス嚢病		届
	BJ 鶏白血病		届
	BK 鶏脳脊髄炎		
	BL 鶏アデノウイルス随伴性ウイルス感染症		
	BM アデノウイルス感染症	a 封入体肝炎 b 心膜水腫性症候群 c アデノウイルス性筋胃びらん	
	BN 産卵低下症候群		
	BO 鶏伝染性貧血		
	BP ウイルス性腱鞘炎・関節炎		
	BQ トリニューモウイルス感染症		

大項目	中項目	小項目	備考
2. 細菌性感染症	BR 狂犬病		法
	BS ジステンパー		
	BT 犬パルボウイルス感染症		
	BU 犬ヘルペスウイルス感染症		
	BV 犬パラインフルエンザウイルス感染症		
	BW 犬伝染性喉頭気管炎		
	BX 犬コロナウイルス感染症		
	BY 犬伝染性肝炎		
	BZ 猫白血病ウイルス感染症		
	CA 猫免疫不全ウイルス感染症		
	CB 猫汎白血球減少症〈猫パルボウイルス感染症〉		
	CC 猫ウイルス性鼻気管炎		
	CD 猫カリシウイルス感染症		
	CE 猫コロナウイルス感染症	a 猫伝染性腹膜炎 b 猫腸コロナウイルス感染症	
	CF ミンクアリューシャン病		法 法 法 法 法 届 届 届 届 届 届 届 届 届 届 届 届 届 届 届 届 届
	A 炭疽		
	B 出血性敗血症		
	C ブルセラ病		
	D 結核病		
	E ヨーネ病		
	F 牛肺疫		
	G 気腫疽		
	H レプトスピラ症		
	I サルモネラ症		
	J 牛カンピロバクター症		
	K パスツレラ症		
	L 悪性水腫		
	M エンテロトキセミア		
	N ボツリヌス症《牛》		
	O 大腸菌症		
	P 壊死桿菌症		
	Q リステリア症		
	R ヒストフィルス・ソムニ感染症		
	S 伝染性角結膜炎〈ピンクアイ〉		
	T 放線菌症		
U 牛アクチノバチルス症			
V 乳頭状趾皮膚炎			
W デルマトフィルス症			

大項目	中項目	小項目	備考
	X Q熱		
	Y マイコプラズマ肺炎《牛、豚》		
	Z 鼻疽		法
	AA 類鼻疽		届
	AB 破傷風		届
	AC 馬伝染性子宮炎		届
	AD 馬パラチフス		届
	AE ロドコッカス・エクイ感染症		
	AF 腺疫		
	AG 萎縮性鼻炎		届
	AH 豚丹毒		届
	AI 豚赤痢		届
	AJ 豚胸膜肺炎		
	AK グレーサー病		
	AL 豚レンサ球菌症		
	AM 滲出性表皮炎		
	AN 腸腺腫症候群		
	AO 豚アルカナバクテリウム・ピオゲネス症		
	AP 豚のブドウ球菌症		
	AQ 豚抗酸菌症		
	AR 豚のエルシニア症		
	AS 豚のマイコプラズマ関節炎		
	AT アナプラズマ病		法
	AU 流行性羊流産		届
	AV 家きんコレラ		法
	AW 家きんサルモネラ感染症（ひな白痢、家きんチフス）		法
	AX 鶏結核病		届
	AY 鶏マイコプラズマ病（鶏呼吸器性マイコプラズマ病、家禽のマイコプラズマ滑膜炎）		届
	AZ 鶏ブドウ球菌症		
	BA 鶏クロストリジウム症	a 壊死性腸炎 b 壊疽性皮膚炎 c ボツリヌス症	
	BB 伝染性コリーザ		
	BC オウム病		
	BD カンピロバクター腸炎		
	BE ライム病		
	BF ヘモプラズマ症		

大項目	中項目	小項目	備考
3. 真菌性感染症	BG クラミジア症		
	BH エールリヒア症		
	BI ミンク出血性肺炎		
	A 皮膚糸状菌症		
	B カンジダ症		
	C アスペルギルス症		
	D ムーコル症		
	E 仮性皮疽		届
	F 顆粒性皮膚炎		
	G クリプトコックス症		
	H ヒストプラズマ症		
4. 原虫性感染症	I マラセチア皮膚炎		
	J ニューモシスチス症		
	A ジアルジア症		
	B トリコモナス病	a トリコモナス病〈生殖器トリコモナス症〉 b 腸トリコモナス症	届 届
	C トリパノソーマ病		届
	D リーシュマニア症		
	E ヒストモナス症〈黒頭病〉		
	F ヘキサミタ症		
	G コクシジウム症	a アイメリア症 b イソスポラ症	
	H クリプトスポリジウム症		
	I トキソプラズマ病		届
	J ネオスポラ症		届
	K 住肉胞子虫症〈サルコシスチス症〉		
	L ロイコチトゾーン病		届
	M 鶏マラリア		
	N ヘパトゾーン症		
	O ピロプラズマ病〈バベシア症、タイレリア症〉	a ピロプラズマ病 b 東海岸熱 c 小型ピロプラズマ病 d 大型ピロプラズマ病	法
	P バランチジウム症		
	Q エンセファリトゾーン症		
5. 蠕虫性感染症 ①吸虫	A 肝蛭症		
	B 双口吸虫症		
	C 膝蛭症		
	D 槍形吸虫症		
	E 壺形吸虫症		
	F 棘口吸虫症		
	G 肺吸虫症		

大項目	中項目	小項目	備考
②条虫	H 肝吸虫症		
	I 横川吸虫症		
	J 日本住血吸虫症		
	A マンソン裂頭条虫症		
	B 葉状条虫症		
	C 大条虫症		
	D 乳頭条虫症		
	E ベネデン条虫症		
	F 拡張条虫症		
	G 瓜実条虫症		
	H 有線条虫症		
	I 胞状条虫症		
	J 猫条虫症		
	K 多頭条虫症		
	L 単包条虫症		
	M 多包条虫症		
	N 有鉤条虫症		
	O 無鉤条虫症		
	P 小形条虫症		
	Q 縮小条虫症		
R 日本海裂頭条虫症			
S 方形条虫症			
T 棘溝条虫症			
③線虫	A 回虫症	a 犬回虫症 b 猫回虫症 c 豚回虫症 d 牛回虫症 e 馬回虫症 f 鶏回虫症 g 犬小回虫症	
	B 蟯虫症	a 馬蟯虫症	
	C 円虫症	a 馬円虫症 b 普通円虫症 c 無歯円虫症	
	D 毛様線虫症	a 捻転胃虫症 b 牛捻転胃虫症 c オステルターグ胃虫症 d クーペリア症 e トリコストロンギルス症 f ネマトジルス症	
	E 腸結節虫症	a 牛腸結節虫症 b コロンビア結節虫症 c 豚腸結節虫症	
	F 鉤虫症	a 犬鉤虫症 b 猫鉤虫症	

大項目	中項目	小項目	備考
④鉤頭虫 6. 節足動物寄生症	G 肺虫症	c 牛鉤虫症 a 牛肺虫症 b 糸状肺虫症 c 豚肺虫症 d 犬肺虫症	
	H 開嘴虫症	a 気管開嘴虫症	
	I 腎虫症	a 豚腎虫症	
	J 糞線虫症	a 糞線虫症 b 猫糞線虫症 c 乳頭糞線虫症	
	K 眼虫症	a ロデシア眼虫症 b 東洋眼虫症	
	L 食道虫症	a 血色食道虫症 b 美麗食道虫症	
	M 胃虫症	a 大口馬胃虫症 b 小口馬胃虫症 c ハエ胃虫症 d 猫胃虫症	
	N 顎口虫症	a 有棘顎口虫症 b 剛棘顎口虫症 c ドロレス顎口虫症	
	O 糸状虫症	a 犬糸状虫症 b パラフィラリア症 c 指状糸状虫症 d 脳脊髄セタリア症 e 溷睛虫症 f 沖縄糸状虫症〈鼻鏡白斑症〉 g 咽頭糸状虫症 h 頸部糸状虫症	
	P 鞭虫症	a 犬鞭虫症 b 豚鞭虫症 c 牛鞭虫症	
	Q 毛細線虫症	a 家禽・犬・猫の毛細線虫症 b 肝毛細線虫症	
	R 鶏盲腸虫症		
	S 旋毛虫症〈トリヒナ症〉		
	A 大鉤頭虫症		
	A マダニ症		
	B 鶏ダニ症		
	C ハイダニ症		
	D ツメダニ症		
	E 疥癬	a 疥癬〈ヒツジキュウセンヒゼンダニ症〉 b 穿孔ヒゼンダニ症	届
	F 毛包虫症		

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
7. プリオン性感染症	G シラミ症 H ハジラミ症 I ノミ症 J 牛バエ幼虫症 K 馬バエ幼虫症 L 羊バエ幼虫症 M ツツガムシ症 N シラミバエ症 O サシバエ症 P ノサシバエ症 Q アブ症 R ブユ症 A 伝達性海綿状脳症〔牛海綿状脳症（BSE）、羊・山羊のスクレイピー、鹿慢性消耗病（CWD）〕		届 法

Ⅲ 中毒

大項目	中項目	小項目	備考	
1. 植物・飼料による中毒	A	ワラビ中毒《牛、馬》		
	B	スイートクローバー中毒		
	C	レンゲツツジ〈オニツツジ〉中毒		
	D	ユズリハ中毒		
	E	タマネギ中毒		
	F	ネジキ中毒		
	G	ジャガイモ中毒		
	H	その他の植物中毒	a トリカブト b チョウセンアサガオ c バイケイソウ d キョウチクトウ e ソテツ f ドクゼリ g ドクウツギ h ヤツデ i キキョウ j アセビ	
	I	硝酸塩中毒		
	J	尿素中毒		
	K	エンドファイト中毒		
	L	一年生ライグラス中毒		
	M	食塩中毒		
	N	製造粕による中毒	a 綿実油粕 b ナタネ油粕 c 醬油粕	
	O	マイコトキシン中毒	a アフラトキシン	
	P	魚粉中毒		
	2. 農薬・化学物質による中毒	A	有機リン剤中毒	
		B	カーバメイト剤中毒	
		C	ピレスロイド剤中毒	
		D	有機フッ素剤中毒	
E		有機塩素剤中毒		
F		砒素中毒		
G		銅中毒		
H		モリブデン中毒		
I		石炭酸中毒		
J		クマリン系殺鼠剤中毒		
K		除草剤中毒	a ジクワット剤中毒 b パラコート中毒	

IV 呼吸器系と胸腔・胸膜の疾患

大項目	中項目	小項目	備考	
1. 鼻・副鼻腔の疾患	A 鼻の外傷			
	B 鼻出血			
	C 副鼻腔炎			
	D 鼻炎	a 細菌性鼻炎 b ウイルス性鼻炎 c 真菌性鼻炎 d アレルギー性鼻炎 e 歯牙疾患による鼻炎		
	E 鼻腔内腫瘍			
	F 副鼻腔蓄膿症			
2. 咽喉頭の疾患	A 喉頭炎			
	B 喉嚢炎			
	C 気嚢炎			
	D 喉頭麻痺	a 喘鳴症《馬》		
	E 短頭種気道症候群	a 外鼻孔狭窄 b 軟口蓋過長症 c 気管低形成		
3. 気管・気管支の疾患	A 気管損傷			
	B 気管炎			
	C 気管支炎	a 犬伝染性気管気管支炎 b 猫喘息		
	D 気管支拡張症			
	E 気管虚脱			
	F 気管狭窄			
	G 気管内異物			
4. 肺の疾患	A 肺水腫			
	B 肺炎	a 細菌性肺炎 b ウイルス性肺炎 c 真菌性肺炎 d 寄生虫性肺炎 e 好酸球性気管支肺炎 f 吸引性〈誤嚥性〉肺炎		
	C 肺出血〈喀血〉			
	D 肺気腫			
	E 無気肺〈肺虚脱〉			
	F 肺葉捻転			
	G 肺（血管）血栓塞栓症			
	H 肺膿瘍			
	I 肺腫瘍	a 原発性肺腫瘍 b 転移性肺腫瘍		
	J 肺線維症			
	5. 胸膜・縦隔・胸腔の疾患	A 損傷		
		B 胸膜炎		
		C 胸水（症）	a 漏出性 b 滲出性	

大項目	中項目	小項目	備考
	D 気胸 E 縦隔気腫 F 腫瘍	c 膿胸 d 乳び胸 e 血胸 f 腫瘍性 a 中皮腫 b リンパ腫 c 胸腺腫	

V 循環器系の疾患

大項目	中項目	小項目	備考	
1. 心膜の疾患	A 心膜炎			
	B 創傷性心膜炎			
	C 心膜水腫			
	D 心膜血腫			
	E 心タンポナーデ			
2. 心臓の疾患	A 先天性心疾患	a 心房中隔欠損		
		b 心室中隔欠損		
		c 動脈管開存		
		d 卵円孔開存		
		e ファロー四徴症		
		f 肺動脈弁狭窄		
		g 大動脈弁狭窄		
		h 僧帽弁異形成		
		i 三尖弁異形成		
		j アイゼンメンガー症候群		
		k 右大動脈弓遺残症		
		B 弁膜疾患	a 僧帽弁閉鎖不全	
			b 三尖弁閉鎖不全	
			c 肺動脈弁閉鎖不全	
	d 大動脈弁閉鎖不全			
	C 急性循環不全、ショック			
	D 心不全			
	E 肺性心			
	F 心臓調律異常〈不整脈〉	a 異所性刺激生成異常		
		b 刺激伝導異常		
	G 心臓の肥大と拡張			
	H 心筋炎			
	I 心筋症	a 拡張型心筋症		
b 肥大型心筋症				
c 拘束型心筋症				
J 心内膜炎				
K 心内膜症				
L 犬糸状虫症				
M 腫瘍				
N ブロイラーの腹水症				
3. 血管の疾患	A 血管の損傷			
	B 血栓症	a 牛の後大静脈血栓症		
	C 塞栓症			
	D 動脈瘤			
	E 動脈破裂			
	F 動脈硬化症			
	G 静脈瘤			
	H 静脈周囲炎			
	I 血管炎			
	J 腫瘍			

大項目	中項目	小項目	備考
4. リンパ系の疾患	A リンパ節炎(リンパ腺炎) B リンパ管炎 C リンパ腫		

VI 消化器系と腹腔・腹膜の疾患

大項目	中項目	小項目	備考
1. 口腔・咽頭の疾患	A 先天性口腔鼻腔瘻	a 硬口蓋裂	
		b 軟口蓋裂	
		c 口唇裂	
	B 後天性口腔鼻腔瘻	a 潰瘍	
		a 悪性黒色腫〈メラノーマ〉	
	C 口腔・舌の炎症	b 扁平上皮癌	
	D 口腔内異物	c 線維肉腫	
	E 口腔内腫瘍	d エプーリス	
	2. 歯・下顎の疾患	F 舌の損傷	
A 発生異常			
B 交換異常〈脱換異常〉			
C 過剰歯			
D 歯列・摩耗異常			
E う歯			
F 歯周病			
G 歯槽骨膜炎			
H 歯瘻			
I 歯肉炎			
3. 唾液腺の疾患	A 耳下腺炎		
	B 唾液腺瘻		
	C 唾液性粘液瘤		
4. 食道の疾患	A 食道内異物		
	B 食道狭窄		
	C 血管輪異常		
	D 巨大食道症		
	E 食道拡張		
	F 食道憩室		
	G 食道破裂		
	H アカラシア		
	I 食道炎		
	J 腫瘍		
5. 反芻胃の疾患	A 第一胃鼓脹症	a 急性	
		b 慢性	
	B 第一胃食滞		
	C 第一胃アシドーシス	a 急性	
		b 慢性	
	D 第一胃アルカローシス 〈第一胃腐敗症〉		
	E 第一胃パラケラトーシス		
	F 迷走神経性消化不良		
	G 創傷性第二胃・腹膜炎		
	H 第三胃炎		
I 第三胃食滞			

大項目	中項目	小項目	備考	
6. 単胃の疾患	J 第四胃炎			
	K 第四胃潰瘍			
	L 第四胃弛緩症〈第四胃食滞〉			
	M 第四胃変位			
	N 第四胃捻転			
	A 胃内異物			
	B 胃炎	a 急性 b 慢性		
	C 急性胃拡張、過食疝			
	D 胃穿孔、胃破裂			
	E 胃捻転			
	F 胃拡張・捻転症候群			
	G 胃潰瘍			
	H 胃の腫瘍			
	I 幽門狭窄			
	J 噴門狭窄			
	7. 腸の疾患	A 腸閉塞		
		B 腸重積		
C 腸捻転				
D 腸の変位				
E 腸の穿孔・破裂				
F 腸石症				
G 腸内異物				
H 腸気泡症				
I 盲腸便秘				
J 盲腸の拡張〈弛緩〉・捻転				
K 結腸鼓脹症				
L 巨大結腸症				
M 直腸憩室				
N 腸炎		a 細菌性腸炎 b ウイルス性腸炎 c 真菌性腸炎 d 寄生虫性腸炎		
O X大腸炎				
P 出血性腸症候群				
Q カタル性腸痙攣〈痙攣疝〉				
R 炎症性腸疾患〈IBD〉				
S 吸収不良症候群				
T タンパク漏出性腸症		a リンパ管拡張症		
U 十二指腸潰瘍				
V 小腸内細菌過剰増殖〈抗菌薬反応性腸症〉				
W 直腸脱				

大項目	中項目	小項目	備考	
8. 肛門の疾患	X 腫瘍	a 消化器型リンパ腫 b 腺腫、腺癌 c 平滑筋腫、平滑筋肉腫		
	Y 直腸ポリープ			
	Z 疝痛			
	A 鎖肛			
	B 直腸腔瘻			
	C 肛門嚢炎			
	D 肛門周囲瘻			
	E 肛門周囲の腫瘍	a 肛門周囲腺腫 b 肛門嚢腺癌		
	F 肛門脱			
	9. 肝臓・胆道・膵臓の疾患	A 肝臓の損傷		
B 肝炎		a 急性肝炎 b 慢性肝炎		
C 中毒性肝障害				
D 栄養性肝障害				
E 肝膿瘍				
F アミロイドーシス				
G 肝線維症、肝硬変				
H 肝リピドーシス(脂肪肝)		a 肥満牛症候群		
I うっ血肝				
J 結節性過形成				
K 肝臓の腫瘍				
L 門脈循環シャント				
M 門脈高血圧症				
N 胆石症、胆泥症				
O 胆嚢炎				
P 胆嚢粘液嚢腫				
Q 胆管閉塞				
R 胆嚢及び胆管の腫瘍				
S 胆管炎、胆管肝炎				
T 膵臓の損傷				
U 膵臓の腫瘍				
V 急性膵炎				
W 慢性膵炎				
X 膵外分泌不全				
10. 腹腔・腹膜の疾患		A 非開放性損傷		
		B 開放性損傷		
		C 腹膜炎		
		D 腹壁ヘルニア		
	E 臍ヘルニア			
	F 横隔膜ヘルニア			
	G 腹膜心膜横隔膜ヘルニア			
	H 食道裂孔ヘルニア			

大項目	中項目	小項目	備考
	I 鼠径ヘルニア J 大腿ヘルニア K 会陰ヘルニア L ヘルニア嵌頓 M 臍炎、臍瘻 N 急性腹症 O 腫瘍	a 中皮腫	

VII 泌尿器系の疾患

大項目	中項目	小項目	備考
1. 腎臓の疾患	A 腎臓の損傷		
	B 腎臓の先天異常	a 嚢胞腎	
		b 腎低形成	
		c 腎異形成	
	C 萎縮腎	a 腎硬化症	
	D 腎膿瘍		
	E 腫瘍		
	F 腎炎	a 糸球体腎炎〈ネフローゼ症候群〉	
		b 尿細管腎炎	
		c 腎盂腎炎	
		d 化膿性腎炎	
		e 間質性腎炎	
	G アミロイドーシス		
	H 腎不全	a 急性	
		b 慢性	
		I 急性腎障害	
		J 慢性腎臓病	
		K 腎石症〈腎臓結石〉	
	L 水腎症		
	M 尿毒症		
	N ファンコーニ症候群		
2. 尿管の疾患	A 尿管破裂		
	B 尿管結石		
	C 異所性尿管		
	D 尿管栓塞		
	E 尿管炎		
3. 膀胱の疾患	A 膀胱炎		
	B 膀胱結石症〈尿石症〉		
	C 膀胱破裂		
	D 膀胱麻痺		
	E 腫瘍		
	F 膀胱憩室		
4. 尿道の疾患	A 尿道の損傷		
	B 尿道結石症		
	C 尿道閉塞		
	D 尿道炎		
	E 腫瘍		
	F 猫下部尿路疾患〈FLUTD〉		
	G 尿路感染症		
5. 排尿障害	A 神経性排尿障害		
	B 非神経性排尿障害		
	C 排尿筋アトニー		

VIII 繁殖障害と生殖器系の疾患

大項目	中項目	小項目	備考		
1. 雄の交尾障害と生殖障害	A 交尾不能症	a 無精液症 b 精液減少症 c 無精子症 d 精子減少症 e 精子無力症 f 精子死滅症 g 血精液症 h 膿精液症			
	B 交尾欲減退症・欠如症				
	C 生殖不能症				
	D 夏季不妊症				
	2. 精巣・精巣上体の疾患			A 先天異常	a 無精巣症、単精巣症 b 潜在精巣〈停留精巣、陰辜〉 c 精巣形成不全
				B 精巣変性	a ライディッヒ細胞腫〈間細胞腫〉 b 精上皮腫 c セルトリ細胞腫
				C 精巣炎	
				D 精巣の腫瘍	
				E 精巣上体炎	
				F 精液瘤	
3. 副生殖腺の疾患	G 精子肉芽腫				
	A 精囊腺炎				
	B 前立腺炎、前立腺膿瘍				
	C 前立腺肥大症、前立腺嚢胞				
	D 傍前立腺嚢胞				
	E 前立腺の腫瘍				
4. 包皮・陰茎・陰囊の疾患	A 外傷				
	B 包茎、嵌頓包茎				
	C 陰茎彎曲				
	D 陰茎の腫瘍				
	E 陰茎強直症				
	F 亀頭包皮炎				
	G 陰囊水腫				
	H 陰囊炎				
	I 陰囊ヘルニア				
	5. 雌の生殖器の先天異常		A 染色体異常		
B フリーマーチン					
C 間性					
D 中腎傍管の部分的形成不全					
E 中腎傍管の隔壁遺残					
6. 陰門・膣前庭・膣の異常と疾患	A 陰門狭窄				
	B 膣狭窄				

大項目	中項目	小項目	備考	
7. 子宮・卵管の疾患	C 腔嚢胞〈腔嚢腫〉			
	D 尿腔			
	E 気腔			
	F 腔炎			
	G 顆粒性陰門腔炎			
	H 腔脱〈腔過形成〉			
	I 腫瘍			
	A 頸管狭窄〈子宮頸管狭窄〉			
	B 頸管閉鎖〈子宮頸管閉鎖〉			
	C 頸管炎〈子宮頸管炎〉			
	D 子宮内膜炎			
	E 嚢胞性子宮内膜過形成			
	F 子宮蓄膿症			
	G 子宮粘液症、子宮水症			
H 子宮筋炎〈子宮炎〉				
8. 卵巣の疾患	I 子宮外膜炎			
	J 子宮腫瘍			
	K 卵管炎			
	L 卵管水腫			
	M 卵管蓄膿症			
	A 卵胞発育障害	a 卵巣発育不全 b 卵巣静止 c 卵巣萎縮		
	B 排卵障害	a 排卵遅延 b 無排卵		
	C 卵巣嚢腫	a 卵胞嚢腫 b 黄体嚢腫		
	D 黄体形成不全	a 発育不全黄体 b 嚢腫様黄体		
	E 黄体遺残			
	F 卵巣炎、卵巣癒着			
	G 卵巣腫瘍	a 顆粒膜細胞腫 b 未分化胚細胞腫		
	9. リピートブリーディング	A リピートブリーディング	a 受精障害 b 早期胚死滅	
		10. 妊娠期の異常	A 流産、早産、死産	a 細菌性 b ウイルス性 d 真菌性 e 原虫性 f 非感染性
11. 胎子の異常	B 長期在胎			
	C 腔脱			
	D 子宮捻転			
	E 子宮ヘルニア			
	A 胎膜水腫	a 羊膜水腫		

大項目	中項目	小項目	備考
12. 分娩の異常、難産	B 胎子の死 C 胎子の奇形・先天異常 A 陣痛の異常 B 産道の異常 C 胎子過大 D 胎子の失位	b 尿膜水腫 a 胎子ミイラ変性 b 胎子浸漬 c 気腫胎 d 水腫胎 a 陣痛微弱 b 強陣痛 a 陰門狭窄 b 膣狭窄 c 頸管狭窄 d 骨盤狭窄 a 胎位異常 b 胎向異常 c 胎勢異常	
13. 分娩後の疾患	A 産道の損傷 B 子宮脱 C 胎盤停滞〈後産停滞〉 D 産褥性子宮炎 E 悪露停滞症 F 産褥熱 G 子宮炎－乳房炎－無乳症 症候群 H 乳熱〈産褥麻痺〉 I ダウナー牛症候群〈産前 ・産後起立不能症〉 J 産褥痙攣〈産褥性硬直、 産後急痛〉		

IX 運動器系の疾患

大項目	中項目	小項目	備考
1. 筋肉の疾患	A 損傷		
	B 筋炎	a 多発性筋炎 b 好酸球性筋炎	
	C 先天異常		
	D ミオパシー	a 神経原性筋疾患 b 筋原性筋疾患	
	E 筋の萎縮		
	F 筋の拘縮		
	G 腫瘍		
	H 白筋症		
	I 重症筋無力症		
	J 麻痺性筋色素尿（血）症 《牛、馬》		
2. 腱の疾患	A 腱炎		
	B アキレス腱断裂		
	C 腱鞘炎		
3. 関節の疾患	A 関節炎	a 免疫介在性多発性関節炎 b 関節リウマチ c 感染性関節炎	
	B 腫瘍		
	C 捻挫		
	D 脱臼	a 肩関節脱臼 b 肘関節脱臼 c 成長板 d 膝蓋骨内方脱臼 e 股関節脱臼	
	E 関節の拘縮・硬直		
	F 変形性関節症〈骨関節症〉		
	G 離断性骨軟骨症〈離断性骨軟骨炎〉		
	H 二頭筋腱滑膜炎		
	I 肘関節形成不全〈肘異形成〉	a 内側鉤状突起離断 b 肘突起癒合不全	
	J 前十字靭帯断裂		
	K 後十字靭帯断裂		
	L 側副靭帯断裂		
	M 半月損傷		
	N 股関節形成不全〈股異形成〉		
	O レッグペルテス病		
4. 滑液胞の損傷	A キ甲腫		
	B 肘腫		
	C 膝瘤		
5. 骨折	A 骨折の分類	a 開放骨折	

大項目	中項目	小項目	備考
6. その他の骨の疾患	B 骨折の治癒機転 C 整復・固定法 D 骨移植 A 骨の炎症 B 腫瘍 C 発育異常 D ハイエナ病 E 骨粗鬆症 F 線維性骨異栄養症 G (肺性) 肥大性骨症 H 頭蓋下顎骨症	b ソルターハリス分類 a 軟骨内骨化 b 骨膜内骨化 c 仮骨 a 外固定 b 内固定 a 皮質骨移植 b 海綿骨移植 a 骨膜炎 b 骨髄炎 c 汎骨炎 d 外骨症〈骨瘤〉 a 原発性骨腫瘍 b 転移性骨腫瘍	
7. 蹄・爪の疾患	A 釘傷 B 踏創 C 蹄血斑・挫跖 D 蹄球炎 E 蹄皮炎 F 趾間腐爛 G 裂蹄 H 白帯裂〈白線裂〉 I 蟻洞 J 蹄叉腐爛 K 蹄葉炎 L 蹄球びらん M 蹄底潰瘍 N 舐囊炎 O 蹄関節炎 P 爪の疾患 Q 趾皮膚炎		

X 神経系の疾患

大項目	中項目	小項目	備考	
1. 脳の疾患	A 先天異常	a 小脳形成不全 b 水頭症 c 後頭骨形成不全		
	B 脳外傷			
	C 脳炎			
	D 脳腫瘍	a 原発性脳腫瘍 b 転移性脳腫瘍		
	E 脳水腫			
	F リンソーム病〈リンソーム蓄積病〉			
	G 脳虚血			
	H 脳充血			
	I 髄膜脳炎	a 壊死性髄膜脳炎〈パグ髄膜脳炎〉 b 肉芽腫性髄膜脳炎		
	J 大脳皮質壊死症			
	K 脳軟化			
	L 先天性痙攣症〈ダンス病〉			
	M 豚ストレス症候群			
	N 発作性障害	a てんかん		
	O 動揺病			
	P 代謝性脳障害	a 肝性脳症 b 尿毒症 c 低ナトリウム血症 d 低血糖		
	Q 加齢性変化			
	2. 脊椎・脊髄の疾患	A 先天性異常	a クモ膜嚢胞 b 脊髄空洞症 c 水脊髄症	
		B 環椎軸椎不安定症〈環椎軸椎亜脱臼〉		
		C 頸椎不安定症	a ウォブラー症候群〈馬、犬〉	
D 脊髄外傷				
E 脊髄炎				
F 脊髄・脊椎腫瘍				
G 変形性脊椎症				
H 椎間板疾患		a ハンセンⅠ型 b ハンセンⅡ型 c 頸部椎間板疾患 d 胸腰部椎間板疾患		
I 馬尾症候群				
J 椎間板脊椎炎				
K 脊髄梗塞		a 線維軟骨塞栓症		
L 脊髄軟化症				

大項目	中項目	小項目	備考
3. 末梢神経系の疾患	M 変性性脊髄症 A 脳神経疾患 B 末梢神経損傷〈ニューロパシー〉 C 炎症 D 変性 E 腫瘍	a 前庭障害〈捻転斜頸〉 b 三叉神経麻痺 c 顔面神経麻痺 d 内耳神経障害 a 多発性神経根神経炎《犬》	
4. 代謝性疾患	A チアミン欠乏症 B ビタミンD過剰症 C 肝性脳症		

X I 感覚器系の疾患

大項目	中項目	小項目	備考
1. 眼の疾患	A 眼瞼・第三眼瞼の疾患	a 眼瞼裂傷	
		b 眼瞼炎	
		c 眼瞼内反症・外反症	
		d 睫毛異常	
		e 第三眼瞼腺脱出〈チェリーアイ〉	
	B 眼窩・鼻涙系・結膜の疾患	a 眼球突出	
		b 鼻涙管狭窄	
		c 乾性角結膜炎	
		d 結膜炎	
		e 強膜炎	
	C 強膜炎	a 強膜炎	
	D 角膜の疾患	a 角膜穿孔	
		b 角膜炎	
		c 角膜潰瘍	
		d デスメ瘤	
		e 角膜ジストロフィー	
		f 乾性角結膜炎	
	E ぶどう膜の疾患	a ぶどう膜炎〈ホークトー小柳ー原田様疾患〉	
	F 水晶体の疾患	a 白内障	
		b 水晶体脱臼	
G 硝子体疾患	a 第一次硝子体過形成遺残		
H 緑内障	a 先天性緑内障		
	b 原発緑内障		
	c 続発性緑内障		
I 眼底の疾患	a 網膜剥離		
	b 視神経炎		
	c 進行性網膜萎縮		
	d コリー眼異常		
J 眼の腫瘍	a 虹彩・毛様体腫瘍		
	b 眼瞼腫瘍		
	c 角膜扁平上皮癌		
	d 類皮腫		
2. 耳の疾患	A 耳血腫		
	B 外耳炎		
	C 中耳炎		
	D 内耳炎		
	E 耳道腫瘍		
	F 聴覚障害		

X II 血液・免疫系の疾患

大項目	中項目	小項目	備考	
1. 赤血球系の疾患	A 溶血性貧血			
	B 失血性貧血			
	C 赤血球産生障害による貧血	a 再生不良性貧血 b 鉄欠乏性貧血 c 巨赤芽球性貧血 d 栄養障害性貧血 e 腎性貧血 f 内分泌疾患 g 薬物・毒素 h 感染		
	D 赤血球増加症			
	E 先天性赤血球異常症			
2. 白血球系の疾患	A 白血球増加症・減少症〈好中球、好酸球〉			
	B 好中球機能異常症			
	C リンパ球及び免疫組織の異常による疾患			
	D 牛白血球粘着不全症			
3. 骨髄の疾患	A 骨髄低形成・無形成			
	B 骨髄癆	a 腫瘍 b 骨髄線維症 c 骨髄壊死 d 大理石骨病		
	C 赤芽球癆			
	D 骨髄異形成症候群			
	E 慢性骨髄増殖性疾患			
	4. 凝固系疾患	A 血小板の異常		
	5. リンパ造血器腫瘍	A リンパ腫		
		B 白血病	a 急性 b 慢性	
		C 形質細胞腫、多発性骨髄腫		
		D 組織球由来腫瘍		
E 肥満細胞腫				
6. 免疫不全	A 先天性免疫不全			
	B 後天性免疫不全			
7. 脾臓の疾患	A 脾腫			
	B 結節性過形成			
	C 脾梗塞			
	D 腫瘍			
	E 捻転			
8. 胸腺の疾患	A 胸腺腫			

XIII 内分泌・代謝系の疾患

大項目	中項目	小項目	備考
1. 下垂体の疾患	A 尿崩症	a 中枢性尿崩症 b 腎性尿崩症	
	B 下垂体機能亢進症〈先端肥大症〉	a 下垂体腺腫	
	C 下垂体機能低下症〈下垂体性矮小症〉		
2. 甲状腺の疾患	A 甲状腺機能亢進症		
	B 甲状腺機能低下症		
	C 甲状腺の腫瘍		
	D 甲状腺炎		
3. 上皮小体の疾患	A 上皮小体機能亢進症		
B 上皮小体機能低下症			
4. 副腎の疾患	A 副腎皮質機能亢進症〈クッシング症候群〉		
	B 副腎皮質機能低下症		
	C 副腎の腫瘍	a 副腎皮質の腫瘍 b 副腎髄質の腫瘍	
5. 膵臓の疾患	A インスリノーマ		
	B 糖尿病		
	C 糖尿病性ケトアシドーシス		
6. 性腺の疾患	A エストロジェン過剰症		
7. ビタミンの代謝障害	A ビタミンA欠乏症・過剰症		
	B ビタミンB群欠乏症		
	C ビタミンC欠乏症	a 壊血病	
	D ビタミンD欠乏症・過剰症		
	E ビタミンE〈トコフェロール〉欠乏症【セレン欠乏症を含む。】		
	F ビタミンK欠乏症		
8. 無機物の代謝障害	A 骨軟化症、くる病		
	B 低マグネシウム血症	a グラスステタニー b 子牛の低マグネシウム血症性テタニー c 反芻動物の輸送テタニー	
	C 乳熱〈分娩性低カルシウム血症〉		
9. 微量元素の欠乏症	A コバルト欠乏症〈くわず病〉		
	B 銅欠乏症		
	C 鉄欠乏症		
	D 亜鉛欠乏症		
	E マンガン欠乏症		

大項目	中項目	小項目	備考
10. タンパク質の代謝障害	F ヨウ素欠乏症〈単純性甲状腺腫〉 A 低タンパク血症 B アミロイドーシス		
11. 糖質・脂質の代謝障害	A ケトーシス《牛》 B 脂肪肝〈肥満牛症候群〉 C 肥満症 D 黄色脂肪症 E 汎脂肪織炎〈猫の黄色脂肪症〉 F 脂肪壊死症 G 高脂血症 H 低血糖症 I 妊娠中毒《羊》		
12. 尿酸代謝異常	A 尿酸塩沈着〈痛風〉		
13. 水・電解質の代謝異常	A 脱水症 B 浮腫 C 酸塩基平衡の異常 D 血清電解質の異常 E 子牛発作性血色素尿症		
14. その他	A 熱射病〈日射病〉 B 寒冷感作		

XIV 皮膚の疾患

大項目	中項目	小項目	備考
1. 感染性皮膚疾患	A 細菌性	a 膿皮症〈表在性、深在性〉	
	B ウイルス性	a 皮膚糸状菌症	
	C 真菌性	b カンジダ症	
		c マラセチア皮膚炎	
		d クリプトコックス症	
		e スポロトリコーシス	
	D 寄生虫性	a 吸血昆虫による皮膚疾患	
		b ダニによる皮膚疾患	
2. 免疫介在性疾患		c 夏癬	
	A 蕁麻疹		
	B 接触性皮膚炎		
	C アトピー性皮膚炎		
	D 薬疹		
	E 天疱瘡、類天疱瘡		
	F エリテマトーデス		
	G 多型紅斑		
	H 無菌性結節性脂肪織炎		
	I 牛のワヒ〈コセ〉		
3. 栄養・内分泌皮膚疾患	A 黒色棘皮症〈黒色表皮肥厚症〉		
4. 先天性皮膚疾患	B 犬の限局性石灰沈着症		
	A 色素欠乏症		
5. 脱毛症	B エーラス・ダンロス症候群	a カラーダイリューション脱毛症	
		b 脱毛症X	
6. 腫瘍性皮膚疾患	A 乳頭腫		
	B 肥満細胞腫		
	C 扁平上皮癌		
	D 悪性黒色腫〈メラノーマ〉		
	E 組織球腫		
	F リンパ腫		
	G 皮脂腺腫瘍		
	H 耳垢腺癌		
	I 軟部組織肉腫		
	A 瘰癧		
7. その他の皮膚疾患	B 光線過敏症		
	C 熱傷、凍傷		
8. 皮下織の疾患	A 蜂窩織炎		
	B 褥瘡		
	C 潰瘍		
	D 瘻孔		

XV 乳房・乳腺の疾患

大項目	中項目	小項目	備考
1. 感染性疾患	A 乳房炎	a 細菌性 b 真菌性	
2. 非感染性疾患	B 潰瘍性乳頭炎 C 乳頭腫 A 乳房浮腫 B 血乳症 C 乳頭損傷 D 乳管〈乳頭管〉狭窄 E 乳腺腫瘍		

XVI 新生子の疾患

大項目	中項目	小項目	備考
1. 先天性疾患	A 奇形	a 感染性	
		b 遺伝性	
2. 出生時の疾患	B 新生虚弱子症候群		
	A 臍炎		
	B 尿膜管開存		
3. 出生直後の疾患	C 新生子仮死		
	A 胎便停滞		
	B 臍ヘルニア		
	C 受動免疫不全		
	D 下痢症		
	E 肺炎		
	F 新生子黄疸		

XVII 行動の疾患

大項目	中項目	小項目	備考
1. 伴侶動物の問題行動	A 攻撃性に関連する問題行動	<ul style="list-style-type: none"> a 序列関連性攻撃行動 b 葛藤性攻撃行動 c 自己主張性攻撃行動 d 同種間攻撃行動 e 遊び関連性攻撃行動 f 捕食性攻撃行動 g 恐怖性攻撃行動 h 縄張り性攻撃行動 i 所有性攻撃行動 j 食物関連性攻撃行動 k 転嫁性攻撃行動 l 愛撫誘発性攻撃行動 m 母性攻撃行動 n 疼痛性攻撃行動 o 特発性攻撃行動 	
	B 恐怖・不安に起因する問題行動	<ul style="list-style-type: none"> a 分離不安 b 恐怖症 c 全般性不安障害 	
2. 産業動物と展示動物の問題行動	C その他の問題行動	<ul style="list-style-type: none"> a 過剰発声、過剰咆哮 b 不適切な排泄 c 関心を求める行動 d 情動障害（股端舐性皮膚炎、尾追ひ行動、脇腹吸い行動、心因性脱毛症、毛織物吸い行動、織物摂食行動） e 自傷行動 f 多動障害 g 不適切なひっかき行動 h 高齢性認知機能不全 	
		<ul style="list-style-type: none"> a 自傷行動 b カニバリズム c 耳齧り、尾齧り d 異物舐め e 蹴癖、咬癖、齧癖、熊癖 f 抜毛症 g 往復歩行 	